

高校教育とがん治療の両立のために

長期療養中の 高校生の希望に応える 好事例集



高校教育とがん治療の両立のために

長期療養中の
高校生の希望に応える
好事例集

はじめに

「第3期がん対策推進基本計画」(2018年3月)では、義務教育段階である小・中学生がん患者の教育継続サポートに比べて、高校生がん患者に対する学業継続支援の取り組みが大きく遅れていることが指摘されています。

それは高校教育の統括が各自治体に任せられ、都道府県により体制が異なることが理由と考えられます。

そこで、さまざまな地域やいろいろな体制のなか、長期療養中のがん患者で高校教育継続が可能であった好事例を共有し、活用していくことの必要性から、本書が発行されることとなりました。コロナ禍の始まりの時期に、収集し始めた好事例は、その後の経過の中でさらに充実しつつあります。

本書を手にとっていただいた方の環境と、この好事例を重ね、療養中の高校生のニーズに近い事例などを参考にさせていただき、具体的な高校教育提供の体制整備の一助となれば幸いです。



はじめに …… 3

もくじ

本書を活用していただくために …… 4

〈事例概要表〉好事例の特徴 …… 8

インターネットコミュニケーションツール、システム …… 12
OriHime kubi ロイロノート Edmodo

行政機関における支援の重要性 …… 13

好事例

1 **学習支援計画書に基づく自習を支援**することにより
単位取得できた県立工業高校生 …… 22



2 **私立・公立間の隔壁がない地域で**
特別支援学校の教諭に支えられた高校生 …… 30



3 **治療後遺症により将来の夢を断念しつつも**
大学受験に臨んだ私立高校3年生 …… 38



4 **ソーシャル・ワーカー (SW) が院内の高校生を把握、**
もらさず教育支援につなげたことで
成人病棟に入院後も**教育継続**ができた高校生 …… 46



5 **同年代の学習ボランティアとのかかわりから**
将来的なキャリアビジョンを明確にできた高校生 …… 54



6 **県教育庁主導の体制**による遠隔授業により
転校せずに単位取得した県立高校生 …… 62



7 **特別支援学校高等部に転校し、週に最大30時間の**
授業が確保できた県立高校生 …… 70



8 **県立通信制高校への転校**で単位認定が受けられた
県立高校普通科の3年生 …… 78



9 **県により常時確保された講師が、**
在籍校の非常勤講師となり
対面授業が受けられた県立高校生 …… 86



10 **実習授業に代わる課題提出により**
単位取得ができた県立商業高校生 …… 94



11 **病室内での実習課題に取り組む環境を整え**
単位を取得した県立服飾学科高校生 …… 102



12 **県教育長のトップダウン**で在籍校から
遠隔授業を提供された県立高校生 …… 110



13 **在籍校の遠隔授業と支援学校の訪問授業で**
単位を取得した高校生 …… 118



14 **「長期入院生徒学習支援事業」**により
単位を取得した高校生 …… 126



15 **遠隔授業・対面指導・余暇活動の機会**を希望により
体験できた高校生 …… 134



謝辞 …… 142

〈事例概要表〉好事例の特徴



	ページ	公立／私立	普通科／他	単位取得	転校の有無	対面式授業	遠隔授業	特別支援学校	実習・実技科目	高校入試	キャリア教育	心理的支援	医療・教育間連携	退院後配慮	教育委員会・行政	成人／小児病棟
1 学習支援計画書に基づく自習を支援することにより単位取得できた県立工業高校生	22	公	工	○	無	○			○			○	○	○	○	小
2 私立・公立間の隔壁がない地域で特別支援学校の教諭に支えられた高校生	30	私	普	○	有	○		○	○			○	○	○		小
3 治療後遺症により将来の夢を断念しつつも大学受験に臨んだ私立高校3年生	38	私	普	○	無	○				○	○	○				小
4 ソーシャル・ワーカー（SW）が院内の高校生を把握、もらさず教育支援につなげたことで成人病棟に入院後も教育継続ができた高校生	46	公	普	○	有	○		○	○			○		○		成
5 同年代の学習ボランティアとのかかわりから将来的なキャリアビジョンを明確にできた高校生	54	私	普	×	無	○					○	○				成
6 県教育庁主導の体制による遠隔授業により転校せずに単位取得した県立高校生	62	公	普	○	無		○					○			○	小
7 特別支援学校高等部に転校し、週に最大30時間の授業が確保できた県立高校生	70	公	普	○	有	○		○				○				小
8 県立通信制高校への転校で単位認定が受けられた県立高校普通科の3年生	78	公	普	○	有	○		○				○			○	小
9 県により常時確保された講師が、在籍校の非常勤講師となり対面授業が受けられた県立高校生	86	公	普	○	無	○	○		○			○	○	○	○	小
10 実習授業に代わる課題提出により単位取得ができた県立商業高校生	94	公	商	○	無	○	○	○	○			○	○	○	○	小
11 病室内での実習課題に取り組む環境を整え単位を取得した県立服飾学科高校生	102	公	服飾	○	無		○	○	○			○	○	○	○	小
12 県教育長のトップダウンで在籍校から遠隔授業を提供された県立高校生	110	公	普	○	無		○				○	○	○	○	○	小／成
13 在籍校の遠隔授業と支援学校の訪問授業で単位を取得した高校生	118	公	普	○	無	○	○	○	○			○	○	○	○	小
14 「長期入院生徒学習支援事業」により単位を取得した高校生	126	公	普	○	無	○	○		○			○		○	○	小
15 遠隔授業・対面指導・余暇活動の機会を希望により体験できた高校生	134	公	普	○	無	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	小

※項目の説明は次ページをご参照ください

◆ 本書における用語の統一

高校教育：文部科学省文書では「高等学校教育」だが、本書では、がん対策推進基本計画に準じて高校教育に統一

在籍校・前籍校：転校していない事例においては、発病前から在籍している高校を“在籍校”。転校した事例では、発病前に在籍していた高校を“前籍校”として統一

◆ 前ページの〈事例概要表〉項目について

公／私：生徒の在籍校の区別

普通科／他：生徒の在籍校の学科（その他：商業、工業、服飾学科、専門学校など）

単位取得：療養中の学習が在籍校の単位取得の判断材料として認められたか

転校：生徒が療養中の学習継続のために、療養前に在籍していた高校から、別の高校に学籍を移すこと。この好事例集のみの定義といたします。実際は、編入、転出、転籍などは状況により異なっている

対面式授業：療養中、直接指導者と対面で学習する方式の授業

遠隔授業：在籍校の教室には行かず、通信機器・システムを用いて自宅や病院内の療養場所で、在籍校の授業の配信をオンタイムで視聴したり、録画された授業をオンデマンドで視聴する学習方法

特別支援学校：視覚障害・聴覚障害・知的障害者、肢体不自由者、病弱者に対して、幼稚園、小・中学校、高等学校に準ずる教育を施すとともに、障害による学習上または生活の困難を克服し自立を図るために必要な知識技能を授ける教育を提供する学校。病院内に職員室・生徒の教室を持つ分教室（本書では支援学級）、または支援学校から病院や施設に教諭が訪問する訪問教育の体制がある

実習・実技科目：普通科の保健体育、音楽などの実技科目や、工業科・商業科・服飾科などの専門科目の単位を在籍校に通わずに履修するための工夫のこと

高校入試：中学3年時に療養中の生徒に対するの入学試験の特別な対応のこと

キャリア教育・心理的支援：教育を提供する者が学習以外の高校時代に必要な教育支援としての対応のこと

医療・教育間連携：療養中の生徒の在籍校との学習進捗や進路に関する情報提供、教職員や仲間との交流に関する連携のこと

退院後配慮：退院後には治療継続や免疫力低下による行動制限、体力回復に時間を要するなどの理由で在籍校の教室への通学が困難な場合が多いが、このような状況に対する在籍校の配慮のこと

教育委員会・行政：義務教育でない高校教育は各校長の裁量権が大きい。特に私立高校の場合は教育委員会からの通達が実践されにくい。そのような現状の中での教育委員会・行政の指導または連携体制のこと

成人／小児病棟：高校生が治療を受けている診療科の種別。高校生年代の療養は、さまざまな理由により小児科病棟と成人病棟に分散している

インターネットコミュニケーションツール、システム

近年のインターネットの活用拡大によって、いろいろなサービスが生まれています。ここでは本書の事例に登場するコミュニケーションツールをご紹介します。

OriHime (オリヒメ)

「ロボットと人ではなく、人と人をつなぐロボット」をコンセプトに開発された遠隔操作ロボット。手の平に乗せられるサイズで、全長は約20cmほど。インターネットを通じて遠隔からの操作が行え、内蔵されているカメラやマイク、スピーカー、自由に動かせる腕で周囲の人とのコミュニケーションをとります。

<https://orihime.orylab.com>



kubi (クビ)

日本語の「首」を由来とし、左右に300°上下に90°自由自在に稼働する、手軽に利用できるテレプレゼンスロボット。手元のタブレット端末とkubiをつなぎ、Zoomなどのテレビ会議アプリケーションを使用することで、通話先とのビデオコミュニケーションが可能になります。

<https://kubi-robot.com>



ロイノート

インターネットを使って学習支援を行うためのプログラム・システム・アプリ。生徒がそれぞれの手元にあるパソコンやタブレットで、そこに示された課題に個人やグループで取り組み、その結果を提出します。提出された課題は生徒同士で画面上で共有することもできます。

<https://n.loilo.tv/ja/>



Edmodo (エドモド)

インターネットを使って学習支援を行う教育 SNS。生徒がそれぞれの手元にあるパソコンやタブレットから Edmodo で意見や解答を投稿し、クラス全体でリアルタイムに共有することができます。

<https://new.edmodo.com>



行政機関における
支援の重要性

行政機関における支援の重要性

「がん対策推進基本計画」は、がん対策基本法（平成18年法律第98号）に基づき策定されたもので、がん対策の総合的かつ計画的な推進を図るため、がん対策の基本的方向について定めるとともに、都道府県がん対策推進計画の基本となるものです。

平成30年3月9日に策定された「第3期がん対策推進基本計画」において「がん患者が治療を受けながら学業を継続できるよう、入院中・療養中の教育支援、退院後の学校・地域での受入れ体制の整備などの教育環境の更なる整備」をすることが求められていますが、現在でもなお、いろいろな課題があります。

がんで入院中の学生に適切な教育を提供するには、どのようなことが必要でしょうか。「把握」「コーディネート」「教育提供」の流れで行政機関が支援を行っていく重要性について考えたいと思います。

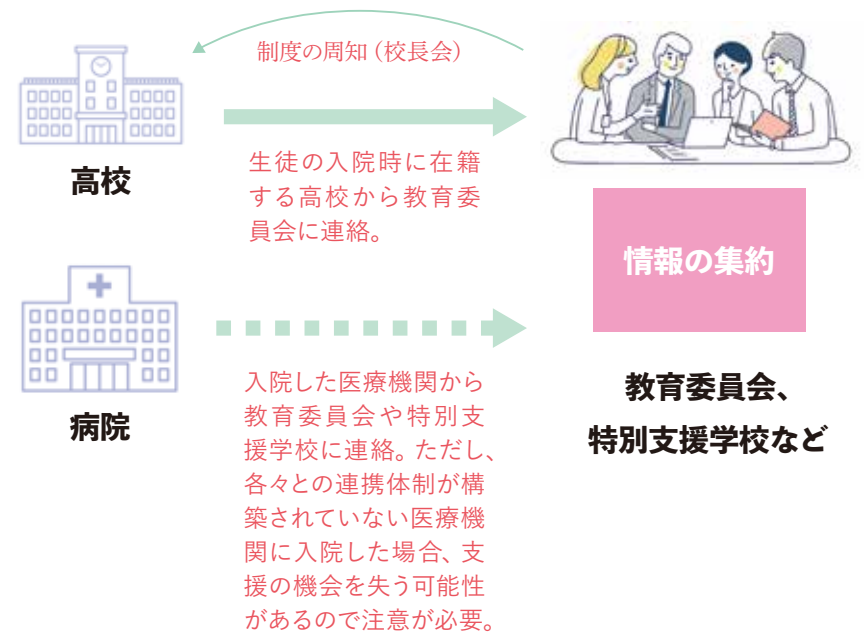
1 がんで入院した高校生を網羅して把握する体制づくり

現在、多くの教育委員会が教育支援を行った高校生などの把握に努めています。しかしながら、年度毎の支援実績調査による把握が大多数で、入院時点でリアルタイム把握している都道府県は、まだまだ少数なのが現状です。

また入院時に把握している場合であっても、連絡連携体制によっては網羅的に把握できていないことも考えられ、本来支援できたはずの生徒を見逃している可能性もあります。

在籍高校からの相談や入院した病院からの連絡だけに頼るのでは

網羅的な把握体制とは



より広く網羅、把握できる体制の構築が急務



なく、より広く網羅して把握する体制構築のためには、生徒の入院時に、まず学校から教育委員会などへ報告を行うことが、がんで入院中の生徒の教育支援を始める第一歩であり、最も必要とされるステップです。そして、その制度を校長会などで周知していくことも重要です。

2 コーディネーターの設置

現在、病院が学校と共同して教育の提供を行っていますが、自校の生徒が入院するという経験を持つ学校や教諭は、それほど多くありません。そこで、ある程度の経験をもつ教育委員会の職員や特別支

教育委員会がコーディネーターとなる例

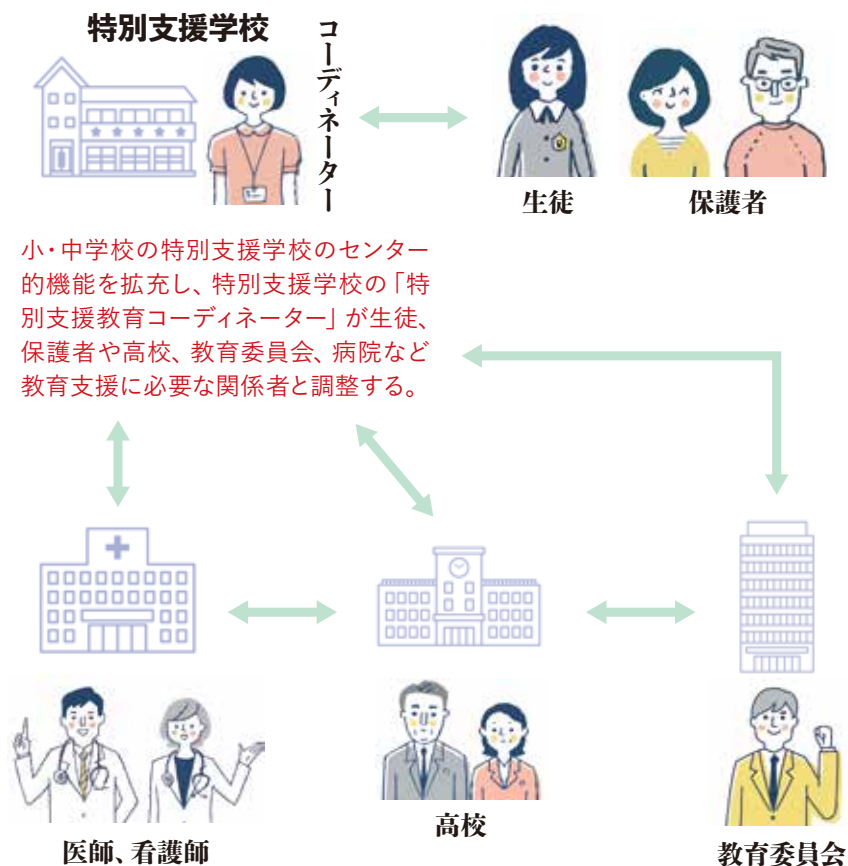


援学校教諭などがコーディネーターとして関係者を主導し円滑に調整していく必要があります。

入院した高校生などに教育支援を行うには多くの人々、具体的には、入院している生徒とその保護者、実際に教育を提供する高校および教諭、病状に応じて対応するために生徒の健康状態を把握している

特別支援学校がコーディネーターとなる例

(特別支援学校がセンター的機能をはたす)



医療従事者、教育支援のために必要な環境を提供する医療機関などが関与しなければ成り立ちません。

それぞれへの調整を経験の少ない在籍校が行わなければならない場合、慣れない作業で時間を要することも多く、教諭や学校の負担も大きくなります。また、病気と闘っている生徒にどのように接して教育継続をしていけばいいのかなど、悩みを持つ教諭も多く存在します。

速やかで円滑な高校教育の支援にコーディネーターの存在は益々重要となっています。

3 教育提供の方法

実際の教育支援には、在籍校教諭による訪問教育や病院の院内学級の教諭が支援するなど、いろいろな支援方法がありますが、近年ではICT（情報通信技術）の発達による遠隔教育も重要な支援方法になってきています。

現場からは、病院に訪問する時間がとれない、課題の配布をどうするか、などの課題があがっている。遠隔授業やWebを用いた手法であると、こうした問題を解決しやすい。

遠隔授業に必須となるWi-Fi機器の使用について、医療機関の理解を得られないケースがあった。必要性を理解し、調整をしてもらえる病院側の窓口が欲しい。

遠隔教育を行った現場の声

特別支援教育において重要なことは、「つながること」だと認識している。遠隔授業は、日常の「教室」とつながりやすい。復学にも有利に働いていると考えられ、「つながり続けること」を意識して支援することが重要である。

遠隔授業については、黒板が見えにくい、声も聴きづらいことがあるといった問題の指摘がある。このあたりは技術の改善を期待しつつ、工夫が必要。一方、大事なのは「つながること」。「授業を受ける」ということよりも「1日の学校生活を共に過ごす」といった感覚。モチベーションの維持を意識している。

病院側の環境整備をしてほしい。高校生は、学習内容が各々の学校で異なるため、入院中の高校生を一括して授業をすることは難しい。Webで行っても声が漏れて同室の生徒に影響するので、個々に対応できるブースなどの環境整備が必要。

Wi-Fi機器に関して、年契約にすると月あたりの料金は安価にはなるが、入院中の高校生がいらないなど、使用回数がない期間も出てくる。月額契約にするとその問題は解消できるが、使用開始までに1ヶ月ぐらいかかるといった問題点が生じている。

いずれも教育支援として良い点がありますが、「教育支援について理想と考える方法は何か」というアンケートでは、多くの教育委員会が「遠隔教育による支援」と回答していることや、文部科学省が進める「GIGA スクール構想」もあり、遠隔教育が担う比重は高くなると思われれます。本書でご紹介する以下のような活用方法も進歩し広がりつつありますので、積極的に好事例などの情報を収集し活用することが重要です。

- 教育委員会が手配した OriHime や kubi (12ページ)を貸し出して遠隔授業を行う。多数の生徒が入院している場合は、テレビ会議システムなどを使用している。



OriHime

- 音楽や体育といった自分たちの教室から移動が必要な授業では、クラスメイトに OriHime を運んでもらい、なるべく一緒に過ごしているような体験ができるように心がけている。
- 入院している病院が学校から遠方にある場合、課題の配布に、クラウドサービスを用いる。



学習支援計画書に基づく 自習を支援することにより 単位取得できた 県立工業高校生

1



学習の進み具合で
改定されていく
柔軟な
学習支援計画書

病院が契約中の
学習塾から
講師を派遣。
院内で対面学習

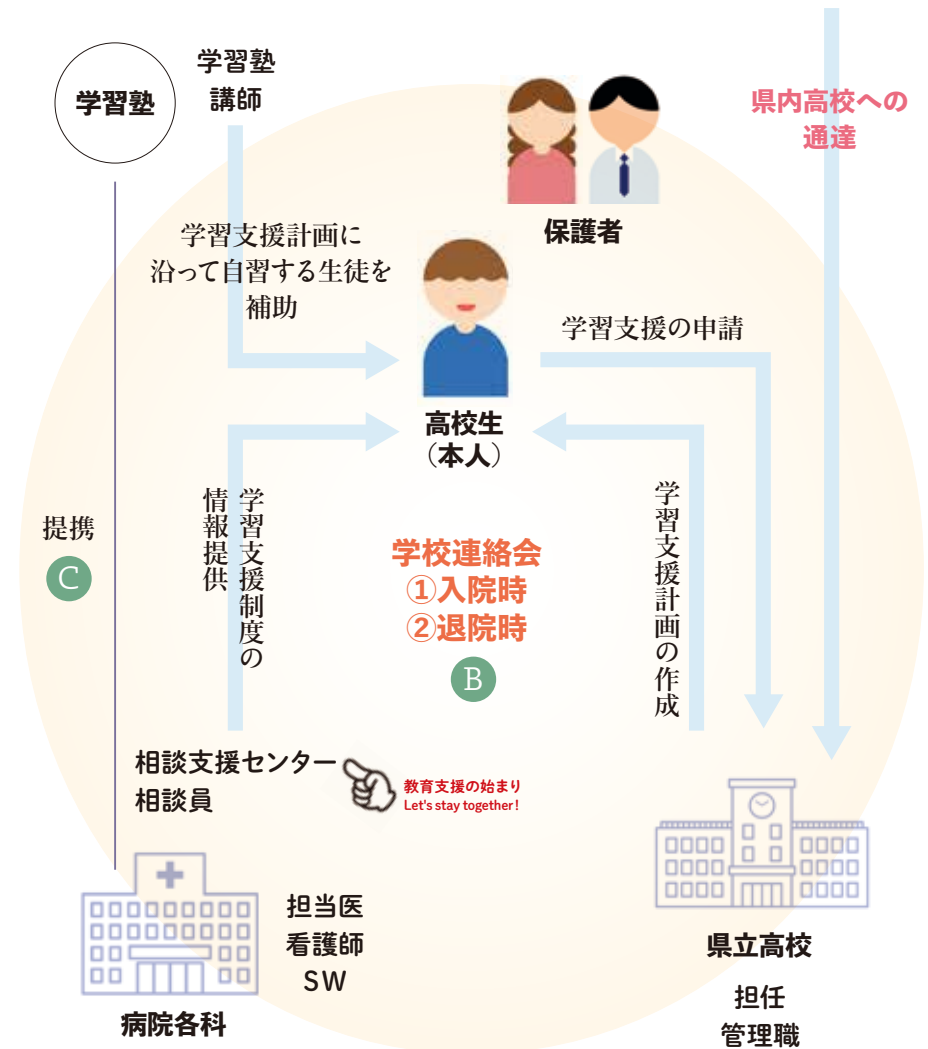
	内容	制度など
教育連携 窓口	病院 : 相談支援センター相談員 学校 : 担任・養護教諭 行政 : 県教育委員会	
連携方法	学校連絡会 : 担任副校長、相談員 B 担当医、看護師、ソーシャル・ ワーカー (SW) 患者・家族 ①入院時: 学習支援計画共有 ②退院時: 入院中、病院での学 習進捗を学校側と頻繁に情報 交換	A 県教育委員会『長期療養生徒への 教育支援制度』 ①学習支援計画の作成 ②教務規程の弾力化: 進級判定 の緩和、レポートなどの活用
学習支援 体制	学習支援計画に基づき自習 場所 : 院内学級 学習支援者 : 学習塾講師派遣	病院が学習塾と連携 (費用は病院負担) C
学習方法	対面式	
単位認定	有	個別に作成された学習支援計画に 基づく
転校の有無	無	

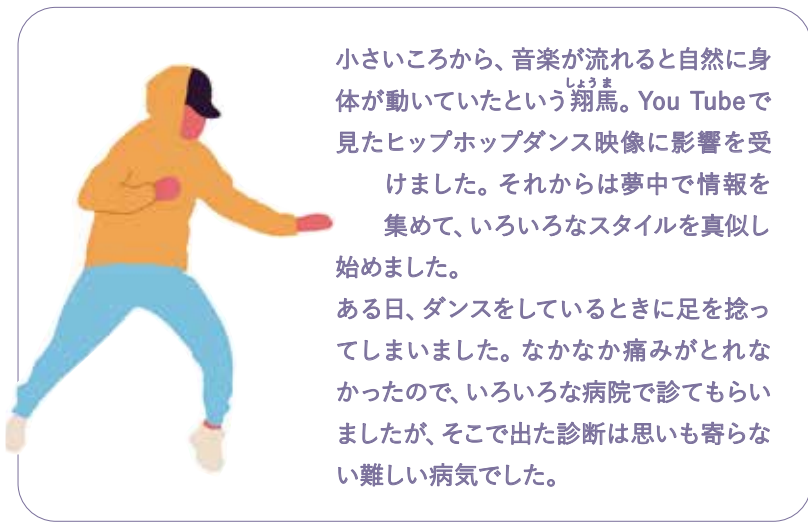
H28年(2016年)長期療養生徒への教育支援に関する通達

- 長期入院生徒に関する学習支援計画の作成
- 教務規定の弾力化
 進級判定の緩和
 レポートなどの活用



A 県教育委員会





小さいころから、音楽が流れると自然に身体が動いていたという翔馬。You Tubeで見たヒップホップダンス映像に影響を受けました。それからは夢中で情報を集めて、いろいろなスタイルを真似し始めました。

ある日、ダンスをしているときに足を捻ってしまいました。なかなか痛みがとれなかったので、いろいろな病院で診てもらいましたが、そこで出た診断は思いも寄らない難しい病気でした。

県教育委員会の教育支援制度（学習支援開始まで）

翔馬の診断が確定し、長期入院治療が始まりました。あまり病気をしたことがなく、ましてや入院などは初めてでしたので、両親も翔馬も不安ばかりでした。

医師と看護師は、教育支援について相談支援センター相談員（以下、相談員）に依頼しました。相談員は翔馬と両親に、高校教育継続支援のしくみについて説明をし、まず高校に相談するよう勧めま



本人も家族も、できれば転校することなく同級生と一緒に卒業を迎えたいと思っていましたので、その方法をみなさんで考えていただき、とても嬉しく思いました。（母）

した。翔馬から相談を受けた高校は、さっそく県教育委員会（以下、県教委）に連絡し、高校の担任は長期療養に伴う教育支援¹を要する翔馬のために学習支援計画書の作成をしました。

病院契約の学習塾講師も（学習支援の実際）

入院してすぐに学校連絡会が開かれました。参加者は翔馬と両親、高校の担任と管理者（副校長・校長）、担当医、看護師、ソーシャルワーカー、相談員です。

担当医から、病状、療養期間、入院生活の制限などの説明があった後、高校の担任は、県教委からの指示に基づき学習支援計画を作成し療養中の単位取得のための学習支援計画書¹が提示され、それに添った学習方法（レポート作成、指定問題集など）を具体的に相談しました。計画書は入院時の翔馬の情報で作成されていますが、病状などの変化によって改定されていき、相談員が常に現状を把握できるので柔軟に対応していただけますとの説明がありました。

実は翔馬も両親も、課題達成に不安がありました。相談員が病院が契約している学習塾からの講師派遣の提案をしたところ、翔馬も興味を持ち、相談員と一緒に、その学習塾講師と翌週に会ってみる

Points 1

県教育委員会による『長期療養生徒への教育支援に関する通達』

高校生の学習継続の困難さが表面化するたびに医療現場から各事例の問題点を県教育委員会へ連絡し続けた結果、個別の状況に合わせた学習支援計画書の作成が県立高校にとって必須事項となった。

ことになりました。彼は翔馬が考えていたより若く、話しやすいと感じたので、ぜひお願いしたいと手続きを進めてもらいました。

いよいよ治療が始まりましたが、点滴が思ったより気になってしまったり、午前中の治療薬投与で体調が悪くなってしまったりと、午後になって数時間の自習をするのがやっとでした。

それでも、翔馬は学習塾講師の来院日が楽しみでした。若い彼とは何か気が合ったし、学生時代の経験談や今まで彼が担当した生徒とのことや、あまり詳しくはなさそうでしたが音楽やダンスのことなど、ほんの少しの雑談ですが、いろいろ話してくれたからです。将来がとても不安で、そんなことを口にしたときに掛けてくれた言葉を印象深く覚えています。[心理的支援] そのときの表情や眼差しから、それは心からの励ましだと分かりました。そんなこともあり、一緒に勉強していると、なんだか安心できるようになってきました。

担当の看護師も、その日の身体ケアの時間を調整して学習塾講師との時間を確保することで背中を押してくれましたし、体調が多少悪いときも何とか院内学級の教室に移動して学習しました。

病院の連携窓口である相談員は、定期的に課題の進み具合を翔馬と確認し合い、単位取得に支障がないか**学校と何度も情報共有**²して

Points 2

相談員が、学習支援計画書に添った進捗状況を定期的に高校と確認し、必要に応じて課題を調整するなどの対応をした。



くれます。[医療・教育連携] また、実技課題の達成が病院内では困難でしたので、入院生活でのリハビリを体育の単位として認めてもらえないかという相談を繰り返してくれました。

翔馬は身体を動かすことは好きだったのですが、リハビリの初めは、なかなか思い通りにはいかないものです。翔馬がリラックスできる会話をしながらリハビリに付き合ってくれる看護師に励まされ、好きな音楽を聴いて気分を高めて明るく過ごせるように工夫をして何とか頑張りました。相談員は入院中の定期試験実施日を担当医へ連絡して、翔馬が高校へ登校して試験を受けられるよう治療予定を調整してくれました。[医療・教育連携]

再びの学校連絡会（退院時）

退院日が決まると、再び学校連絡会が開かれました。今回は入院時の連絡会のメンバーの他に養護教諭も参加しました。退院時の身体のこと、集団生活への復帰可能な時期、退院後の通院頻度、配慮してほしいことなどが担当医から伝えられ、学校からは、通院治療に移った時に単位取得が困難になりそうな教科について、引き続きレポート提出で出席とみなすなどの話がありました。[退院後配慮]

病院が学習塾と契約しての講師派遣は珍しい事例だと聞きました。自習が続く日々でしたので、気持ちの面でも、息子は講師の方に、とても助けいただきました。（父）



利用した学習塾の費用は、病院負担（寄付など）となっていました。自己負担で契約した学習塾の協力を得る例もあるそうです。（母）



私立・公立間の 隔壁がない地域で 特別支援学校の教諭に 支えられた高校生



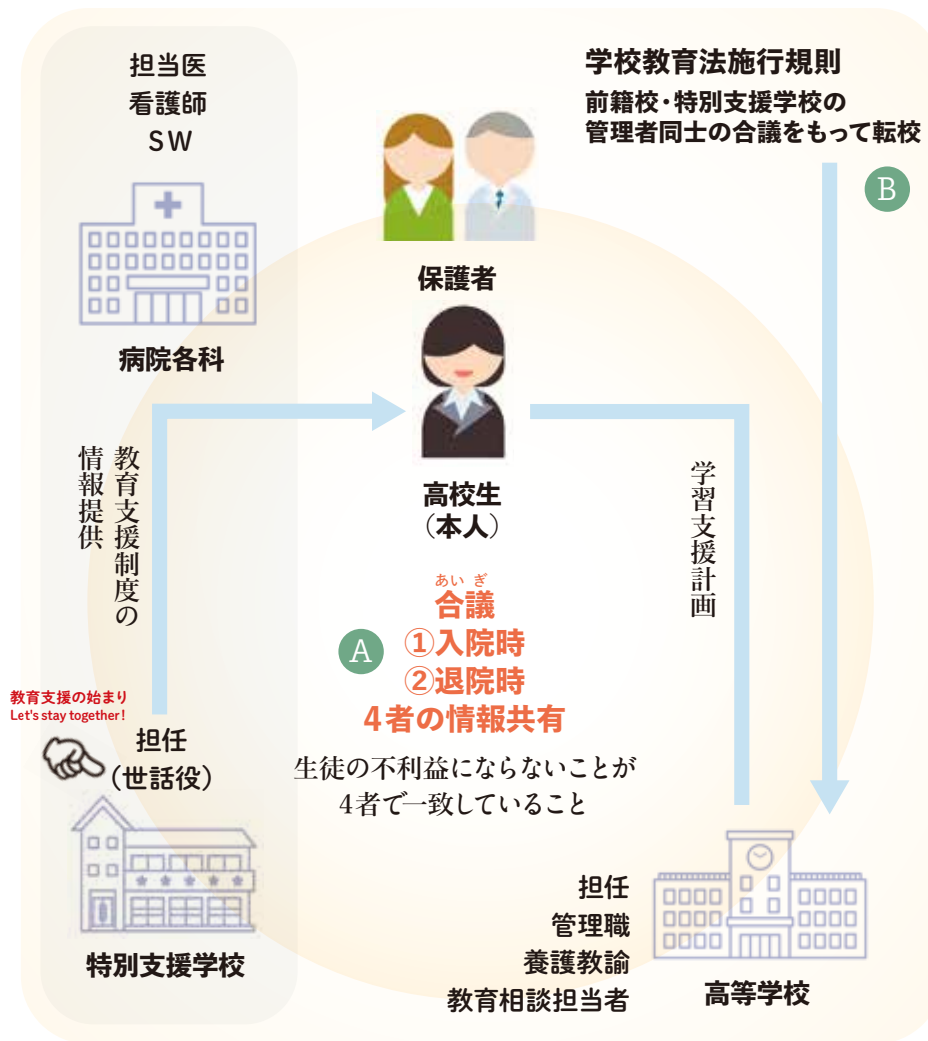
2

公立・私立高校が
特別支援学校との
転校、復学手続きを
積極的に行う体制

特別支援学校の
世話役が精神面で
支援、寄り添うことで
生徒は前向きな
考えを取り戻した

	内容	制度など
教育連携 窓口	病院: ソーシャル・ワーカー (SW) 学校: 管理職、教育相談担当者 特別支援学校: 教諭 (世話役として)、 本人、保護者	世話役: 特別支援学校の窓 口となり本人、病院、C高校 の連携を担当
連携方法	4者会議: A 病院: 担当医、看護師、ソーシャル・ ワーカー 学校: 管理職、担任、養護教諭、 教育相談担当者 B 特別支援学校: 担任、世話役 本人・保護者 ① 合議・入院時: 転校後に前籍校に 戻れるかどうかを高校と特別支援 学校の管理者が話し合い、復学が 可能であることが確認できた上で 特別支援学校に転校する ② 合議・退院時: 学習の進捗状況と 健康状態の共有 3者会議: 毎月の会議 特別支援学校担任、医師、看護師 治療・体調の情報共有し、学習支援 計画書に反映させる	県教育委員会『学校教育法 施行規則』 校長の裁量により再入学を 決定できる 『生徒の不利益にならないこ とがすべての教育現場で一 致している』ことが大前提
学習支援 体制	学習計画に基づく: 特別支援学校担任が作成 場所: 院内学級 学習支援者: 特別支援学校教諭	この県では、公立・私学高校 が同等に、公立特別支援学 校との転校・復学を積極的 に行う体制構築

	内容	制度など
学習方法	対面式	
単位認定	有	個別に作成された学習支援計画書 に基づく
転校の有無	有 (転校→再入学) B	私立から公立への転校





お母さんの影響で小学生からバレーボールを始めた結衣。将来は日本代表になって、世界で活躍したいと思っています。高校進学時も強豪校を選んで入学しました。いい仲間にも恵まれて、ますますバレーボールに打ち込んでいましたが、熱が出る事が多くなり病院で検査を受けました。

生徒の不利益にならないことを（学習支援開始まで）

結衣の診断が確定し、長期入院治療が始まりました。医師と看護師は結衣と両親に、特別支援学校による教育支援体制が病院内にあることを説明し、すぐに病院内の特別支援学校教育相談担当者と面談して具体的な支援の説明を受けました。

結衣と両親は、この特別支援学校による学習支援をぜひ受けたいと考え、高校に申し出をしました。その場合、いったん転校して特別支援学校に入った場合、再び前籍の高校に復学できるかどうかについて、4者会議を開いてもらい話し合いをしました。

まずは前籍校の総意で、特別支援学校の授業を正式に単位として

初めての4者会議の時に「生徒の不利益にならないことが4者で一致していること」のお話があり、家族も娘も不安でいっぱいでしたので、とても嬉しく感じました。（父）



認めてもらうこと。次に退院後に再度入学を認めると約束してもらい、それから前籍校から特別支援学校に転校して、学習継続支援開始という手順が必要でした¹。

4者会議には、結衣と両親、前籍校、特別支援学校、病院の代表者が参加。前籍校の学習計画と特別支援学校で実践している教育課程を情報共有し、特別支援学校にだけ存在する科目を前籍校のどの科目に割り当てるかなど具体的に対応方法や可能性を双方で相談し、高校は情報を持ち帰って管理職で検討しました。

高校の検討期間は結衣が思ったより長くなり心配もしましたが、なんとか退院後に前籍校に復学できることが約束されて、転校の手続きが進み学習支援が始まりました。

特別支援学校の世話役への告白（学習支援の実際）

特別支援学校への転校手続きが完了すると、担任が学習支援計画を立て、週毎の学習予定表も作ってベットサイドに掲示してくれました。

毎朝、担任がベットサイドまで迎えに来てくれたのですが、治療の副作用による下痢と腹痛で学習する気力がなく、口内炎の痛みで

Points 1

この県では、公立・私学高校が同等に、公立特別支援学校との転校・復学を積極的に行う体制構築している。



話をすることさえできない日が続きました。

結衣は、バレーボールのスポーツ推薦での入学で、学力としては入学時から余裕があり学習の遅れは気になりませんでした。しかし、このように体調不良が続くと、せっかくの特別支援学校の授業も受けられなくて、単位取得ができず、同級生と一緒に進級、卒業もかなわなくなる、と心配し始めました。

そんなとき、高校の担任と校長が見舞いで来院し、校長から、「しっかり治療に専念してください。一年留年しても卒業できますよ。無理しないようにね」と声をかけられたことに、結衣はひどくショックを受けました。^{*}仲間と一緒に進級、卒業したかったからです。

下痢や口内炎が回復した後も結衣は食欲がなく、勉強も治療も、すべてにやる気が出ないようでした。そこで、**特別支援学校の世話役²**は、土日も含め毎日結衣のベットサイドで昼食の時間を共に過ごし、結衣の気持ちに寄り添おうとしてくれました。**[心理的支援]**

世話役は、高校に連絡を取ってバレー部の仲間からのメッセージを結衣に届けたり、部の顧問に、できるだけお見舞いに来てもらえないかをお願いしました。学習支援のために一次的に転校はしましたが、結衣が感じる「自分の場所」は高校だったのです。

*本人を思って励まそうと掛けている言葉であっても、生徒の気持ちを傷つけてしまう場合が多い。体験談によると入院生活のモチベーションの維持に必要なのは、「早く入院前の学校生活に戻って同級生と一緒に卒業式を迎えたい気持ち」という声が多い。

その後、食事量は徐々に戻り、リハビリにも積極的に参加できるようになりました。時間があればベットの上でゴムを使った自主的な筋トレも始めました。これらの時間を体育の単位取得として認めたり、病棟行事での活動を学活や家庭科の実技単位とすることや、外泊中は宿題の提出をもって単位取得を認めるなど特別支援学校の担任が工夫をすることで、退院時に復学する基準を満たすことができました。

復学時の問題共有（退院時）

退院日が決定すると、再び4者会議が開催されました。結衣が復学で楽しみにしていたのは部活動ですが、すぐには以前のような活動、活躍は望めないこと。それによって結衣の気力低下が再びあるかもしれないなどの話がありました。

幸い顧問の先生が、頻繁に本人と面会し結衣の様子を理解してくれていましたので、病院は退院後の自宅でのリハビリ方法を提案し、学校はその成果を評価していく**[退院後配慮]**など、結衣の励みになるようなことを意識して行い、**[心理的支援]**見守っていくことになりました。

Points 2

特別支援学校の教諭（この県では、普段から世話役と呼ばれている）は、病院と学校との間に入り、コーディネーター役をすると共に生徒の心のケアにも配慮を続けた。

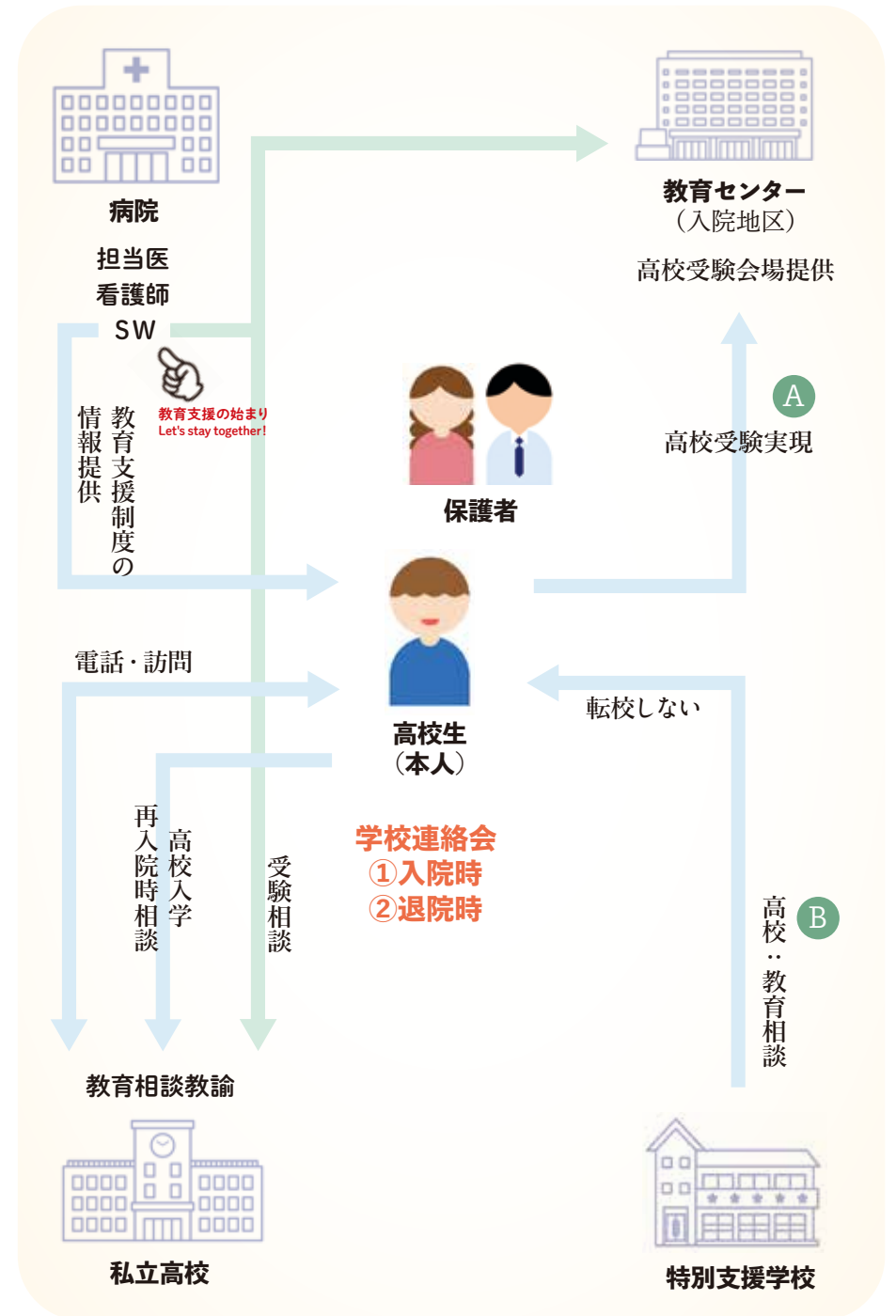
治療後遺症により 将来の夢を断念しつつも 大学受験に臨んだ 私立高校3年生

3

遠隔地での
入院治療のため
入院地高校受験や
再発入院時の支援に
高校教諭が空路で
来院

ソーシャル・ワーカー
が起点となり
進学希望実現へ
支援が集まる

	内容	制度など
教育連携 窓口	病院 : ソーシャル・ワーカー(SW) 学校 : 校長、担任 特別支援学校(訪問教育) : 教諭 本人、保護者	
連携方法	校長とソーシャル・ワーカーが 入院時に電話相談で方針を決定 学校連携会議 ①入院時: 高校教育相談教諭、訪 問学級主任、本人、保護者、ソー シャル・ワーカー、担当医、看護 師 ②退院時: 上記	校長の裁量 A
学習支援 体制	教育相談 ベットサイド 訪問教育担当教諭	教育相談: B 転校せず週4時間の学習支援
学習方法	対面式	
単位認定	有	
転校の有無	無	





郁弥は公立中学3年生の時にユーイング肉腫と診断され、自宅から飛行機移動が必要な遠方の病院に入院し家族と離れて母と二人での闘病生活を送りました。いろいろな方の支援で希望した高校にも入学でき、楽しい高校生活を送っていましたが、病気が再発したのは3年生のときでした。

最初の入院と希望がなかった高校受験（学習支援開始まで）

中学3年生で入院したときは、特別支援学校に転校する手続きをして、1日2時間ほどの訪問教育を受けていました。高校受験のことを心配した病院のソーシャル・ワーカーが、受験への考えを本人に尋ねたところ、郁弥が希望したのは自宅近くの私立高校でした。

その高校は病院から遠方にあり、受験のためとはいえ、治療中の空路移動は困難であると担当医は判断しました。そこでソーシャル・ワーカーは思い切って、郁弥が希望する高校に連絡をとって事情を伝えたところ、受験が可能な場所の用意があれば、非公式ながら校長の裁量で試験官の派遣を考えるという回答でした。¹



ソーシャル・ワーカーの方に、いろいろと提案をしていただき、地元高校受験への道が開けました。まずは相談してみるということが大切と知りました。（母）

すぐに訪問教育の主任が、入院している地区の教育センターに事情を伝えて相談した結果、受験用の部屋の提供が決定し、指定された日に、高校の教諭が試験監督として会場に出向いてくれて受験が実現し、郁弥は見事合格しました。

入学式に間に合うように退院もできて、高校1年の新学期から希望に胸をふくらませた新生活が始まったのです。

しかし高校3年生の夏に再発。再び遠方の病院での治療生活を余儀なくされました。

長期の入院治療が始まるにあたり、母親が高校の担任に電話で卒業までの授業単位について相談したところ、高校側もどのように支援できるかを考えたいということでした。後日、ソーシャル・ワーカーが校長へ電話して、郁弥の病状や入院生活の現状を詳しく説明しました。校長は各授業担当から自習用の課題を送付し、それを提出することで単位認定とすることを約束してくれました。

そして高校の教育相談の教諭が空路で来院し、学校連絡会議が開かれ、具体的な入院中の学習体制についての確認が行なわれました。

Points 1

高校入学受験の方法も、単位取得方法も校長の裁量によるところが大きい。



将来への希望を持ち意欲的な学習（学習支援の実際）

特別支援学校へは転校せずに、高校から送付される課題に取り組む自習と特別支援学校の訪問教育担当の教諭が週4時間の「教育相談」として、病室で本人が希望した科目の学習支援を行いました*。

高校の担任と郁弥や母親は、定期的な提出課題の確認や体調による進み具合などを電話で頻繁に相談し、体調の良い日には夜遅くまで机に向かい、郁弥はあまり学習に取り組めない日のことも考えて、できるときには、まとめて取り組むという意欲を見せていました。

母親は病院近くの宿泊施設に泊まり込んで、毎日付き添っていましたが、郁弥は、なぜか母親がいると別人のように不機嫌そうに振る舞って母親とは話をせず、勉強する姿も見せず、大学受験を心配していた母親をさらに不安にさせていました。

その一方、中学生で入院していた頃にも担当だった訪問教育の教諭には、今までの闘病生活を振り返りながら将来への考えも話していて、放射線技師になりたいという目標と、これまでの治療の影響で、いまは松葉杖歩行であることに大きな不安を持っていることを打ち明けていました。

*現在は転校の決まっていない生徒への、このような支援実施は難しくなっている。



病棟で毎週開催される多職種会議で、その教諭が郁弥が持つ進路に関する不安点を話し、ソーシャル・ワーカーと訪問学級教諭が相談しました。そして母親の了解と担当医の許可を得て、本人の希望する大学に入学相談に行くことになりました。

おそろおそろ訪問した大学で、担当者から「大学は卒業できるかもしれない。でも、就職は無理でしょう」という厳しい言葉を聞かされました。それからの郁弥は、自習課題に取り組む意欲が一気に消失しました。訪問教諭は、今できること、興味のあることを再確認し、励まし、希望の光をなんとか見つけようと苦悶する日々が続きました。[心理的支援・キャリア教育]

退院後にも重要な心理的支援（退院時）

訪問学級の教諭に支えられ、なんとか高校卒業を目指すことに気持ちを切り替えた郁弥は、退院時に高校の課題を残すことなく提出することができました。

退院日の決定後、学校連絡会議が開催され、高校の教育相談教諭が再び空路来院し、**キャリア教育・大学進路についての相談支援と機能喪失に直面した心理的支援の必要事項が共有されました**²。

Points 2

入院中でもキャリア教育を必要としている学生は多い。大学受験を控えた高校生にとって、疾患・治療経験をした自分を知り、受容し、そして前に進むキャリア教育が必要である。

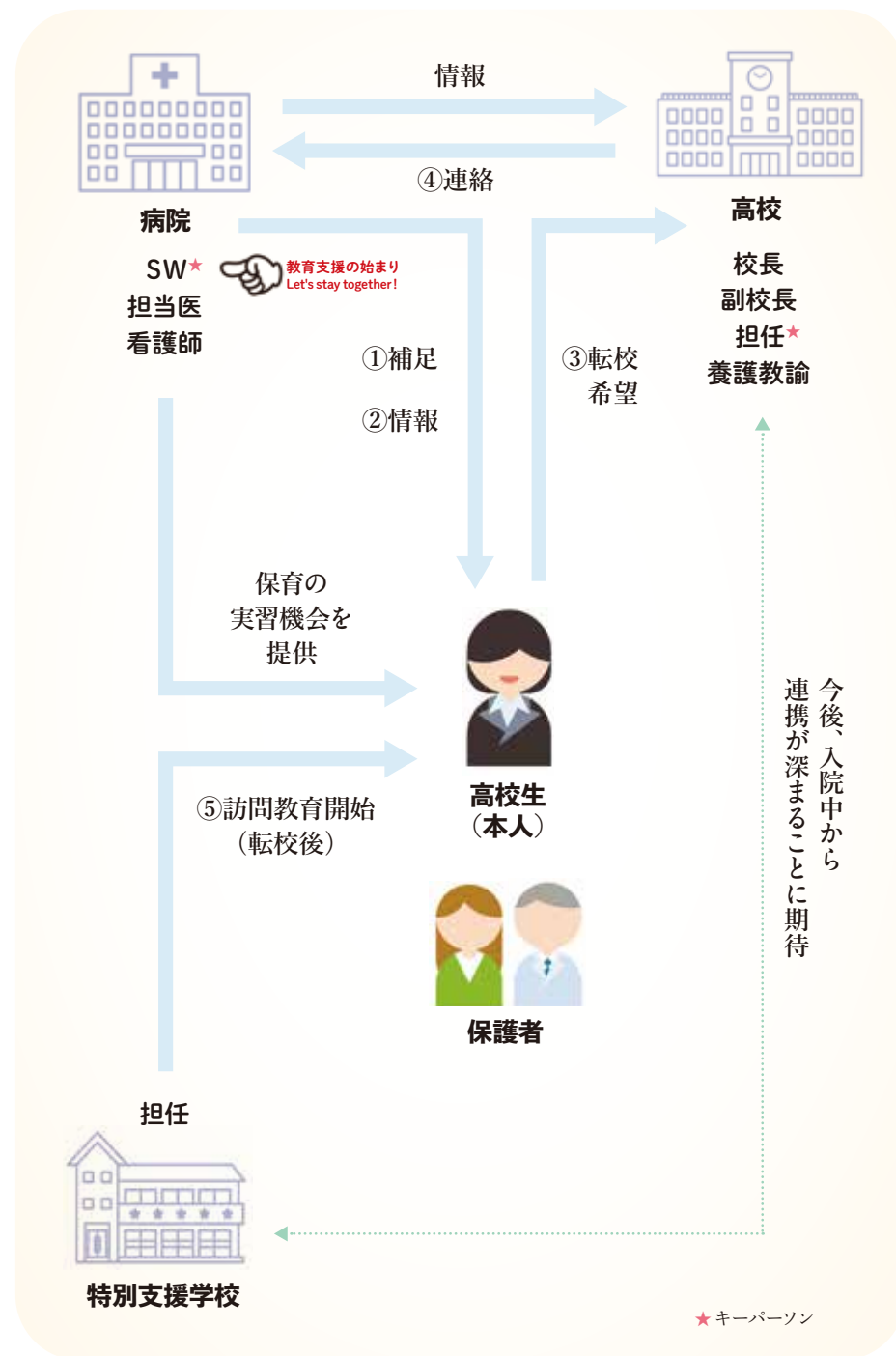
4

ソーシャル・ワーカー(SW)が
院内の高校生を把握、
もらさず教育支援につなげた
ことで成人病棟に入院後も
教育継続ができた高校生

毎週更新される
長期入院者リストの
中からSWが
成人病棟の高校生を
ピックアップ

院内訪問教育制度
は転校手続きが
必要だが両校とも
公立なので退院時の
復学が容易にできる

	内容	制度など
教育連携 窓口	病院: ソーシャル・ワーカー(SW) 学校: 副校長、担任 特別支援学校(訪問教育): 担当教諭 患者、家族	SWが病院のベットコントロールシステムを応用: 長期入院者リストからSWが高校生を抽出し、学習支援ニーズを取りこぼさないように対応
連携方法	入院時、SWから患者・家族を通して、校長または担任へ文科省・厚労省が推奨する学習支援の継続の必要性・利用できる体制について情報共有 ・ 毎月会議: 医師、看護師 訪問教育担当教諭 ・ 退院時調整会議: 校長、担任、養護教諭 訪問教育担当教諭 医師、看護師、SW	令和2年4月1日 文部科学省省令第15号 病気療養中の生徒に対する修得単位の条件緩和など
学習支援体制	訪問教育担当教諭 ベットサイドまたは特別準備された院内の教室	
学習方法	対面式	
単位認定	有	
転校の有無	有	





里香^{りか}の入院した病院では、小児病棟に高校生が入院すると、学習支援についての相談がソーシャル・ワーカー（以下、SW）へ届く仕組みになっていましたが、小児病棟以外に高校生が入院した場合の学習支援ニーズは気づかれないことがほとんどでした。そこで、とられた体制とは……

支援が必要な高校生を見つけるには（学習支援開始まで）

毎週更新される長期入院者リストの中からSWが担当病棟の高校生をピックアップし、患者・家族経由で学校とコンタクトをとる体制が考え出され、定着しました。

長期入院者リストの情報共有をしていた成人病棟の会議で、新規の長期入院者として里香の存在を知ったSWは、担当医師の許可を得て、里香とその家族に面談をしました。

病院内には訪問教育の制度があること、その制度を利用するには転校手続きが必要だが、退院時には両校とも公立なので復学は容易にできることなどを説明しました。里香は訪問教育を希望しました

Points 1

本人は過酷な治療生活で体調が悪い中でも、授業や実習を受けたい気持ちが強く、普通の高校生として過ごせる時間を求めている。



ので次のことを高校担任に伝えてもらいました。

入院中も勉強を続けたいので転校の希望があること。そのための手続きの詳細をSWに説明してもらいたい、ということです。早速、担任から副校長に連絡が行き、SWが副校長と面談して「高校生の病弱教育の体制・単位取得・復学の制度」を説明しました。副校長は校長との相談のために情報を持ちかえり、数日後、校長の了承を得て転校の手続きが進むことになりました。

学校間に求められる情報共有の重要性（学習支援の実際）

高校から特別支援学校に転校する手続きがようやく完了し、入院生活の訪問教育が始まりました。前籍校のテキストに添って主要5科目の日課表を支援学級の担任が毎週作ってくれるのですが、里香はなかなか思うように授業が受けられません。慣れない抗がん剤治療で吐き気がひどい上に、時には高熱も重なり、ベットの上でぐったりする毎日でした。¹

好きな英語だけは遅れずに授業を受けたいと、^{*}かんばってベッドに座ったままで勉強していると、そのうちに回復してくるようなこともありました。担当教諭は、できるだけ本人の希望に沿うように、

*支援学級の教諭は毎月、担当医、病棟看護師と入院生活の予定や体調の情報を共有し、各生徒の学習計画を立てる参考にした。看護師から今日は終日無理だろう、という情報があった日でも、教諭はこれまで通り1日2～3時間の授業予定を持ってベットサイドなどを訪れた。

体調を見ながら授業を行いました。

しかし、好きな英語の授業中でも、いつになく冴えない表情のときがあり、わけを尋ねると、友人のメールで知った定期テストの出題範囲から、いまの自分は勉強がずいぶん遅れてしまったと分かって、不安に思い始めていたのです。高校の授業の進捗が分かるというのですが、以前から**学校間の連絡が取りにくいことを訪問学級の教諭も悩んでいました²**。

保健体育の授業時期と入院期間が重なってしまい、不安が大きくなっていることも、毎月おこなわれている医療・訪問教育の連携会議で共有されました。

小児病棟のプレイルームで幼児たちと過ごす時間を実習として認めてもらえないだろうか、とSWから斬新な提案がありました。SWはすぐに高校の担任と相談し、**なんとか了解が得られ³**、小児病棟の医療保育士が高校の担任から実習課題を聞き、指導・評価に協力をすることになりました^{*}。

退院後の通院治療にも必要とされる支援（退院時）

退院時期の話が出始めた時、里香は、通院治療を希望しましたが、

Points 2

前籍校と特別支援学校の情報共有が定期的にあると学習支援の質が上がる。

*成人病棟の看護師と小児病棟看護師、保育士で連携し、里香が実習を受けられる時間の確認を毎日取り合うことが決定した。里香はとても喜び、入院生活にもメリハリがつくようになった。

訪問教育の制度を利用した方が体調に合わせた学習単位を取得できるメリットがあることを伝え、本人もそれで頑張ろうと入院生活を続けることになりました。

そして、ようやく長い入院生活を終え、退院の日を迎えました。

退院調整会議には、医師、看護師、SWと訪問学級担当教諭に加え、高校の校長、担任、養護教諭も参加し、退院後の通院、体調管理の注意点などを共有しました。

その時、通院日と週1回しかない高校の授業日が重なってしまうことが分かりました。この授業の単位取得が危ぶまれ、本人も、とても心配していましたので、会議後SWと訪問学級教諭が高校に何度も電話相談を続け、病院で受診した日は公休扱いとして単位認定されることになりました。**[退院後配慮]**

里香は病院スタッフの協力、高校の配慮にとっても感謝し自己管理を徹底して病院受診日以外は、できる限り登校しました。そして、その努力を高校の担任は、理解し励ましてくれました。**[心理的支援]**

友人たちの支えもあり、通院と学業の両立を頑張り続け、留年することなく無事卒業の日を迎えることができました。

Points 3

実習の単位認定は入院生活中の体験の利用、そして前籍校の裁量次第で可能である。

退院してしまえば、普通の生活ができそうに思われがちですが、長期入院後の体力回復には時間がかかり、退院後の通院治療も必要です。それにより周期的不調は免れないことが、退院調整会議で共有されました。(母)





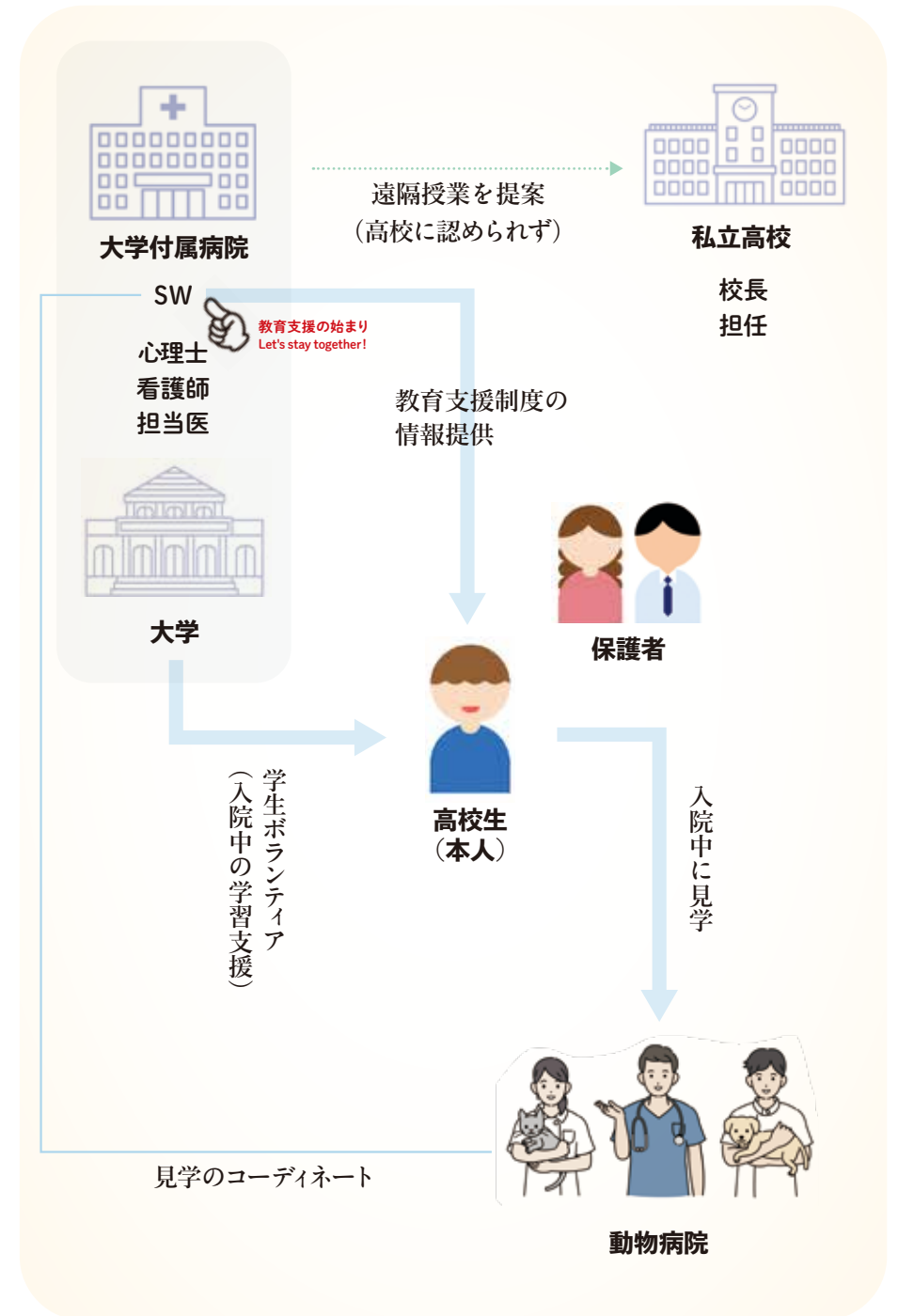
同年代の学習ボランティア とのかかわりから 将来的なキャリアビジョンを 明確にできた高校生

5

目指したい職業を
イメージすることで
治療と学習への
意欲を取り戻す

学習ボランティア
(大学生)との会話が
自らの将来像を描く
ヒントに

	内容	制度など
教育連携 窓口	病院：ソーシャル・ワーカー(SW) 学校：担任 本人・家族	令和2年4月1日 文部科学省省令第15号 病気療養中の生徒に対する修得 単位の条件緩和など
連携方法	入院時、ソーシャル・ワーカーから担任へ文科省・厚労省が推奨する学習支援の継続の必要性・利用できる体制について情報共有	入院時：ソーシャル・ワーカーから学校へ連絡 退院時調整会議：ソーシャル・ワーカーが日程調整し、本人と家族、高校の担任、養護教諭、担当医、看護師、心理士が同席
学習支援 体制	大学生ボランティア ベットサイド、または消灯後のプレイルーム	
学習方法	自習 対面式ボランティア	
単位認定	無	
転校の有無	無	





幼い時からペットと暮らしていた慎吾は、自然と動物好きになり、動物園に通うのが大好きな少年でした。珍しい動物の動画をネットで探したり、動物好きの集まる SNS に投稿するのが楽しみでした。望んだ高校にも合格し、いい友達もできましたが、ある日、身体に異変が起きました。

高校の方針と治療の間で (学習支援開始まで)

慎吾は単位不足を最小限にして、卒業に影響がないようにしようと春休みも利用して入院治療を始めることにしました。その計画を高校の担任と相談して臨んだ入院でしたが、いざ入院治療が始まると担任から、「やはり、1 学期まで入院が長引くとなると、卒業単位をクリアすることはむずかしいと校長が話している¹。あせらず養生して来年の卒業をめざしてはどうだろう。他にも登校できない生徒がいて、君だけを特別扱いはできない状況だ」との話がありました。

同級生から応援のメッセージを貰い入院治療を頑張っていた慎吾

Points 1

担任との話だけではなく、管理職とのコミュニケーションをとっておかないと、進級・卒業が困難になる場合がある。

*クラスメートと一緒に卒業を第一のモチベーションとしている例がほとんどで、それが叶わないと考えるだけで、心の揺れはとても大きい。

は、意気消沈し、治療に向かう気力を失ってしまいました。

慎吾が入院治療を受けているのは、めったに高校生の入院がない成人病棟でしたので、医療以外の相談をする場所としては、がん相談支援センターが紹介されていました。

慎吾の担当に決まったばかりのソーシャル・ワーカーは、この話を聞き、慎吾が通っていた私立高校の担任に、疾病療養中で通学できなくても遠隔教育によって単位が認められるという文部科学省の通知^{**}のことを何度も説明しましたが「校長の方針だから」と聞く耳を持ってはくれませんでした。

医学部生を学習ボランティアとして紹介 (学習支援の実際)

そのような状況では、入院中の学習は自習で補うしかありませんでした。そこでソーシャル・ワーカーは、医学部生を学習ボランティアとして紹介し、彼は体調が良い時に来てくれました。

慎吾は入院治療で治療薬を点滴している 1 時間ほどの間、口の中に氷を入れて頬の粘膜を冷やしたり、保冷効果のある枕で頭を冷やして脱毛を予防するなど、副作用への対応にも一生懸命でした。

しかし、やがて自習にも取り組まなくなり、常にイライラしてい

**平成27年4月 文部科学省により、全日制・定時制課程の高等学校での遠隔授業が制度化された。



る様子を見せ、治療処置にも消極的になってしまいました。やがて、よく眠れなくなったので担当医が心療内科に依頼し、処方を受け臨床心理士の面談が始まりました。

面談室に入ると少し落ち着くようで、イライラして周囲にあたってしまうことを申し訳ないと話したり、目標にしていた大学受験のこと、将来の目標のことを話したりしました。

動物が好きで獣医を目指していましたが、治療のために少し歩くのが不自由になり、さらに自分の家族も、その目標は無理だと考えていると思いついてしまっているのがイライラの原因のようでした。

心理士は、面談中の慎吾が将来の夢を語る時に見せる生き生きする様子を見て、自分の将来は、本人が納得して決めることが重要だろうと考えました。

そこで、担当医、ソーシャル・ワーカーと相談し、ソーシャル・ワーカーの知りあいの動物病院に見学に行く機会をつくり、**実際にその職場で働いている方の意見を率直に聞き、自分で体験した上で、自分自身で考えることを勧めました。**²

その後の面談では、やはり獣医を目指したいという意欲を口にし、治療にも自習にも前向きになりました。

Points 2

自分の将来を考える上で、疾病体験による自分にできること、できないことを受け入れ、自身で考える機会をつくるのがキャリア教育につながる。これは入院治療中でも十分可能であるし、自主的に治療に参加するためにも必要である。

もうひとつ大きかったのは大学生の学習ボランティアの存在です。学習の面ではもちろんのこと、**同じ医療の道を目指しているので、以前にも増して自分も獣医になりたいという気持ちが大きくなったようです。**³ [キャリア教育] このようなことが、入院中の生活や退院後に向けて、モチベーションを維持できる体験となりました。

体力回復のリハビリに取り組む（退院時）

ソーシャル・ワーカーが日程調整し、高校の担任や養護教諭、担当医・看護師、心理士が同席して、退院調整会議を行いました。

議題のひとつに通学方法や校内の移動手段をどのようにするかがありました。慎吾は会議に臨む前、あまり高校に期待していない、特別なお願いをすとかえって留年させられるのではないかという心配を口にするようになり、^{*}家族は、そのようなことは無いと気持ちを和らげようとしたのですが、本人は高校の配慮に頼らず、まず自分でなんとかするんだと、退院するまで体力回復のリハビリに一生懸命に取り組んでいました。

通学は家族が送迎をすることになり、退院後すぐに登校できるようにもなり、将来の目標を実現すべく新たな高校生活を始めました。

Points 3

疾病のあるなしに関わらず、同世代との出会いは、自分の将来を考える上で役立つ。



*高校の先生方もそれぞれの立場で最善を尽くそうとしていただいたと思いますが、やはり先生の言葉による息子の落胆は大きかったのだと気付かされました。(母)

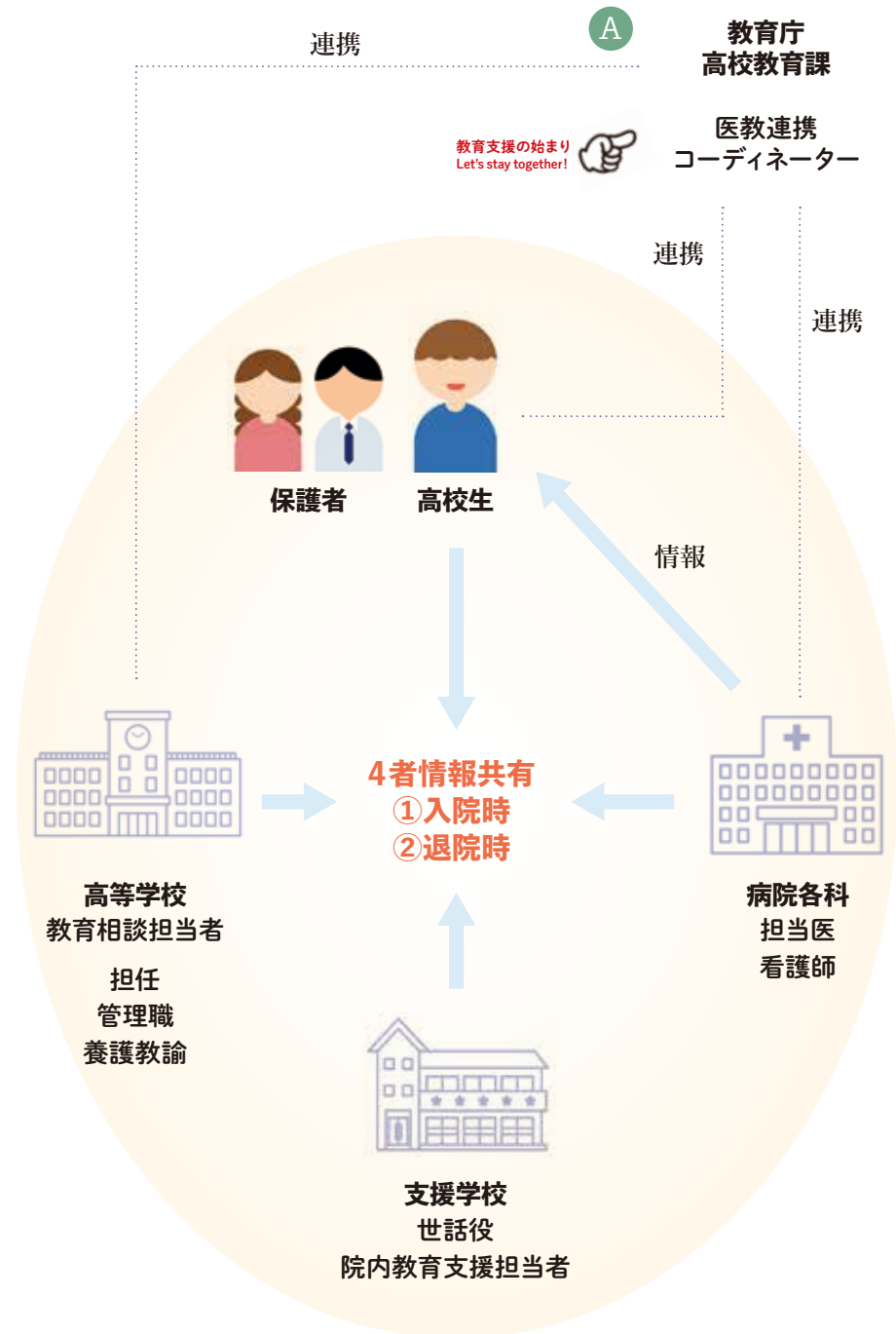
6

県教育庁主導の体制による
遠隔授業により
転校せずに単位取得した
県立高校生

県教育委員会の
コーディネーター

県教育委員会が
タブレットなど
機器の支援

	内容	制度など
教育連携窓口	病院: 医師、小児がん相談室(SW)、事務 学校: 校長、担任 行政: 県教育庁高校教育課(医教連携コーディネーター)	「高等学校段階における入院生徒に対する教育保障体制整備事業」として開始 2か月に1回教育支援について調査研究協力会議を実施 県立高校校長会会長、通信制教育機関、県教育庁、病院、特別支援学校、がんの子どもを守る会会員などで構成
連携方法	教育庁高校教育課に「 A 医教連携コーディネーター」を配置し、病院、在籍校、高校生と連携し、授業が可能かどうかの確認 OriHimeを使用した、遠隔授業の提供をサポート。タブレットやOriHimeなどの機器は県が管理	県の公的支援であり、県立高校生への適応あり 私立、市立高校生への利用はなし
学習支援体制	在籍校の同時双方向型遠隔授業 場所: 病院内個室、会議室など	
学習方法	遠隔(ライブ授業)	
単位認定	有	実施できた授業数による
転校の有無	無	





りょうへい
亮平は、風光明媚な海辺の近くで生まれ、のびのびと育ちました。スポーツが得意で、特にバスケットボールが大好きな高校1年生の明るい男の子です。入学したかった高校に合格し、すぐにバスケット部に入って朝から夜遅くまで毎日汗を流す充実した日々を送っていました。そんな生活にも慣れてきた初夏から学校を休みがちになり、大きな病院で検査をすることになりました。

県教育庁主導の支援（学習支援開始まで）

診断が確定し長期入院治療が始まりました。せっかく入学出来た高校に通えなくなり落ち込んでいた亮平ですが、早く治療を終え、またみんなとバスケットボールをするぞと気持ちを切り替え、そのために病院内でもできる勉強方法を医師に相談しました。

まず亮平から高校へ連絡し「遠隔授業実施に関する申請書」を提出しました。高校の担任は入院前から心配してくれていて、いろいろメールなどで相談を重ねていましたから、すぐに高校が県の教育

Points 1

県教育庁よりAYA世代教育のモデルケースとして試みたいとの提案から、県の人的支援（コーディネーター）、機器などの支援が得られた。

* OriHime
オリィ研究所が開発したコミュニケーションロボット。
(12ページ)
<https://orihime.orylab.com>



Points 2

県立高校生に限定した体制であり、私立・市立高校生については、医教連携コーディネーターを介さず病院と在籍高校が直接、もしくは病院に併設する小・中学部を有する特別支援学校の協力を得て在籍高校からの教育支援が得られるように調整を行う必要がある。

庁高校教育課の医教連携コーディネーターに連絡してくれて、具体的な教育支援についての打ち合わせが、亮平と両親、高校、病院間で実施されました。

後から分かってきたのですが、亮平が住んでいる県は、このような学習支援を県教育庁が主導する全国でも稀な体制で、医療提携コーディネーターも県教育庁の所属です。そのため県立高校の生徒には、例えば遠隔授業に使うタブレットやOriHime^{*}貸し出しなどの県からの支援があり¹、亮平の大きな助けになりました。

しかし同じ地域でも市立、私立高校生徒には、いまのところこの支援は適用されないそうです²。

遠隔授業はインターネット活用が大きな柱です。高校が病院事務室に遠隔授業のWi-Fi利用申請を行い、病院からは亮平の情報を医教連携コーディネーターに連絡して、何度も情報交換を行いました。

亮平がいちばん心配だったのが、このまま高校に在籍できるかどうかです。集めた情報では、いったん転校しなければならない例があったからで、病院での学習や遠隔授業も在籍校の単位取得が認められるとの説明を聞いた時は家族と共に喜びました。

全国的にみて、単位取得に関しては高校の考え方が決定に大きく

影響しています。

医教連携コーディネーターが、貸し出しの手続きを行ってタブレットや OriHime を病院に届けてくれました。病院はインターネット環境の整備をしてくれて同時双方向型遠隔教育開始の準備が整っていききました。

インターネット環境を使っでの授業に備えて、高校の校長をはじめ教諭も多く参加して何度も会議をし、分身ロボットの OriHime を活かせる授業のためのリハーサルを重ねました。

医教連携コーディネーターが遠隔授業手配（学習支援の実際）

授業が可能な日程などの確認を亮平と行い、遠隔授業の手配を医教連携コーディネーターがしました。すべての授業で実施されるのではなく、また検査などの日程もあるため、遠隔授業のみで単位認定までつなげるのは難しい場合もありますが、出席授業数としてカウントし積み重ねられていきます。

遠隔授業が嬉しいのは、みんなと一緒に授業を受けているんだと**感じられるところ**です。³ [心理的支援] 小さいころからスポーツが得意だった亮平は、じっと座っているのが苦手で、以前は授業中も放

Points 3

在籍高校の授業をライブ中継する形式で遠隔授業を受けることが可能だった。



課後の部活動の事ばかり考えていましたが、もうそんなことはありません。

学校の先生も遠隔授業は初めてでしたが、新しいもの好きと自称するだけあってすぐに OriHime の使い方にも慣れたようです。

遠隔授業の無い時は、病院の会議室や空いている部屋で自習をします。体育、美術、家庭科などの実技科目への対応は遠隔授業だけでは困難ですので、今回の亮平より長期入院になる生徒へ、どのような支援をしていくのか、そこが課題です。

多職種チームでカンファレンス（退院時）

退院の日が来ました。定期的に医師、看護師、医教連携コーディネーターなど、多職種チームでカンファレンスを行い情報を共有してきましたが、退院後の高校生活のために高校教諭にも参加してもらい通学再開のカンファレンスを実施しました。

通学時や授業時間中、学校内で移動する時など、肉体的、精神的にも増える負荷をどのように支援していくか。これからの亮平の生活を考えてカンファレンスの調整を医教連携コーディネーターが行いました。



体調の悪い時は、とても勉強どころではありませんでした。医師、看護師の方々は精神的にも亮平自身がいちばん辛いを理解してくれていますから、その時々で言葉をかけてくれたり、見守っていただきました。医教連携コーディネーターの方にも、何度も予定を調整し直してもらい感謝しています。（母）

7

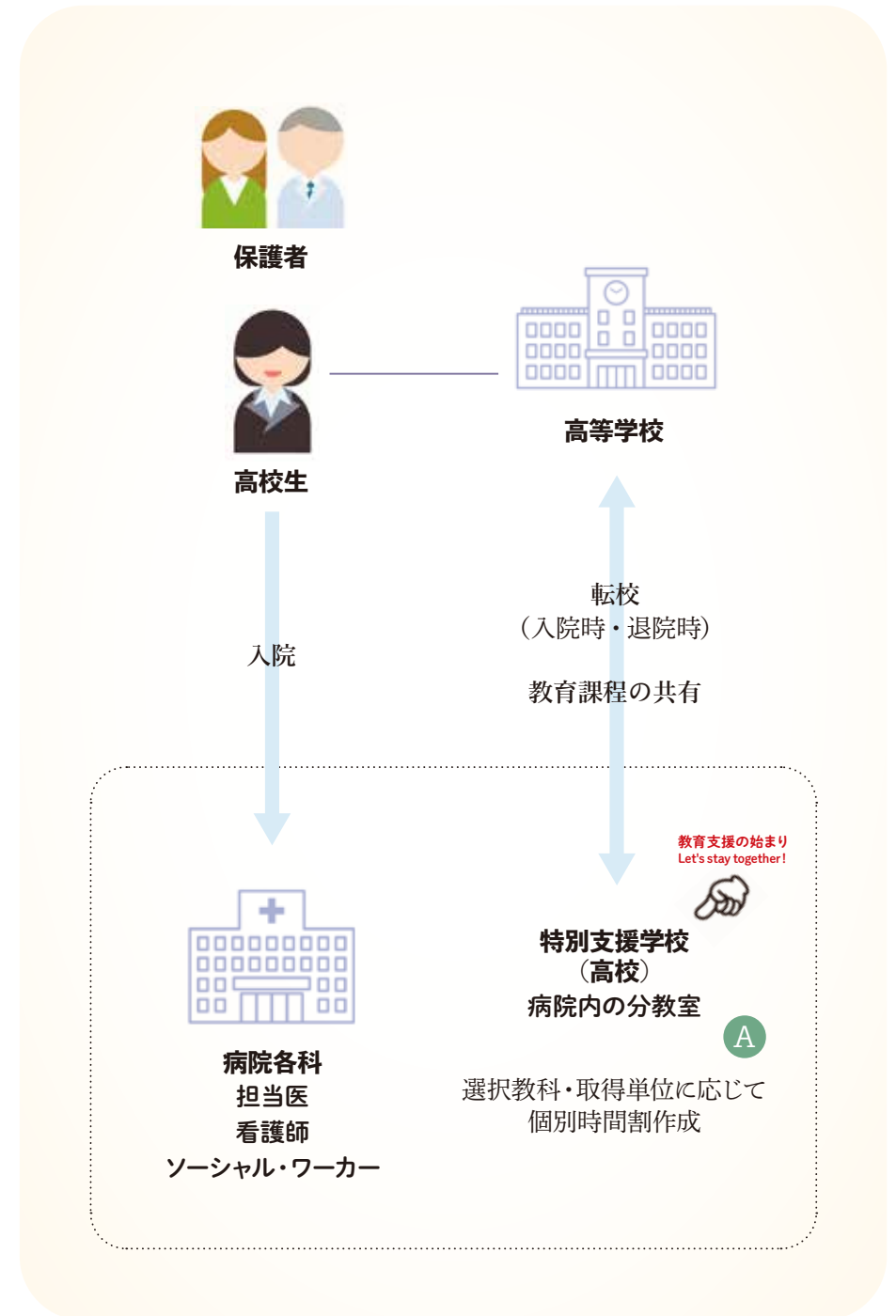
特別支援学校高等部に
転校し、週に最大30時間の
授業が確保できた
県立高校生

院内分教室の
対面式授業で
単位取得

個別の時間割を
作成して普通科の
ほぼ全ての単位を
取得可能



	内容	制度など
教育連携 窓口	病院: 医師、ソーシャル・ワーカー 学校: 担任 特別支援学校高等部	病院内もしくは病院連携の特 別支援学校高等部の分教室を 利用
連携方法	前籍校と分教室で連絡	
学習支援 体制	分教室教諭 場所: 院内分教室 A 前籍校の教育課程に基づき、個々の 選択教科、取得単位に応じて個別の 時間割を作成し、最大週30時間の 授業が組まれる。	
学習方法	対面式	
単位認定	有	
転校の有無	有	





両親と弟と4人で暮らすアイコは、友達の多いおしゃべりの好きな高校1年生です。彼女が住む街は、店舗やオフィスが多いのですが、古くから住み続けている住人もまた多く、とても風情のあるところです。休日はお母さんと買い物に出かけて、カフェでおいしいスイーツを食べるのが楽しみでした。なんでも美味しそうに食べていたアイコが身体の不調を感じたのは夏休みが終わるころでした。

特別支援学校高等部へ転校（学習支援開始まで）

診断が確定し、長期入院治療が始まりました。

大きな病気を経験せず過ごしてきたアイコはとても不安でした。心配なことばかりです。入院期間はどのくらいになるのか。その間、勉強はどのようにするのか。進級はどうなるのか。その先の進学、そして将来は？

それは両親も同じでした。病院、ソーシャル・ワーカー、アイコ、

Points 1

今回は復学ができるので一時的な転校となる。そのようなことも踏まえ在籍校や生徒、家族に転校への理解が得られることが前提となる。

転校を決める時に、復学できるかどうかをしっかりと確認しておくことが大切です。
(ソーシャル・ワーカー)



両親で相談会が開かれ、そこで提案されたのは、特別支援学校高等部に転校し院内の分教室を利用する学習支援でした。

転校が必要となる制度ではありますが¹、授業は病院内にある教室で受けられ、単位取得も問題なく行える場合が多いという説明でした。この支援の特徴のひとつは対面式授業を大切にしている点です。ネットを利用した遠隔授業は利点も多く、広まってきていますが、それでも対面式と併用したほうが良いとの声もあり、入院時に聞いた学習支援の体験談でも「何気ない雑談で気持ちが晴れた」「人が側にいる安心感」などがありました。

もう一つの特徴は、その学生に応じた個別の時間割を作成しての学習支援です。

このような説明があり、アイコと両親でよく話しあった後、転校の希望を出して手続きを行いました。

個別の時間割で院内学習（学習支援の実際）

転校後に前籍校での教育課程に基づいて、選択教科と取得単位に応じて個別の時間割が作成されました。

普通科であれば²、ほぼすべての単位を履修可能で、週30単位ま

Points 2

普通科でない場合には、別対応が必要となる。



での授業を、院内の分教室で受けることができます。

治療のスケジュールを把握して、体調の優れない時には授業を休むことを考慮しておきながらソーシャル・ワーカーとアイコで相談して時間割を考えました³。

アイコは、お母さんに似ているのか、おしゃべり好きで、初めてあった人とでも楽しく話すことができましたので、自分は接客業に向いているんじゃないかな、と感じて将来はオシャレなカフェの経営をしたいと、おぼろげにですが考えていました。

そんなアイコでしたから、やはり自分には対面式授業の方が向いている感じがしました。

日によって時間割は違いますが、多くは朝起きてから身支度を整えて、同じ棟にある教室へ「通学」します。前はバス通学でしたので、雨の日はたいへんだったな、なんて考えながら。

そこには何人かの生徒が通ってきていて、それぞれが違う内容で勉強を進めています。

みんな、なかなか真面目で、話を聞くと院内学習になってからよく勉強するようになったなんて子が多くいます。

Points 3

授業を休むなどした時は、二人で相談しつつ時間割を組み直すことを繰り返した。



そんな同世代の仲間と会うことが、また楽しみで気の合う子とは、いろいろな相談事もするようになりました。

できるだけ早く復学するのが目標ですので、もちろん学校の様子も気になります。だから友達とのSNSは毎日です。

先生ともSNSで時々相談をしています。[心理的支援] いまは手軽な情報交換ツールのおかげで、乗り越えられる壁が増えました。そのツールも相手や場面によって変わります。入院生活中こそ情報収集が大切なんだとアイコは感じています。

再度転校手続きで復学（退院時）

入院前は不安ばかりのアイコでしたが、治療も院内学習も順調に進み、単位取得も積み重なっていきました。

退院の話が出てきて、少し経ったところに復学への相談会が開かれました。こんどは、前の高校への再度転校する手続きを進めます。

病院、ソーシャル・ワーカー、高校、アイコ、両親が集まって退院までのスケジュールと復学に必要な手続き、そして復学してから高校で必要なサポート、家庭で必要なサポートを細かく確認して進めました。



初めは、転校せずに済む方法ばかりを思っていたのですが、娘のほうが冷静で。結果として、娘に合った制度だったと思います。（母）

県立通信制高校への転校で 単位認定が受けられた 県立高校普通科の3年生

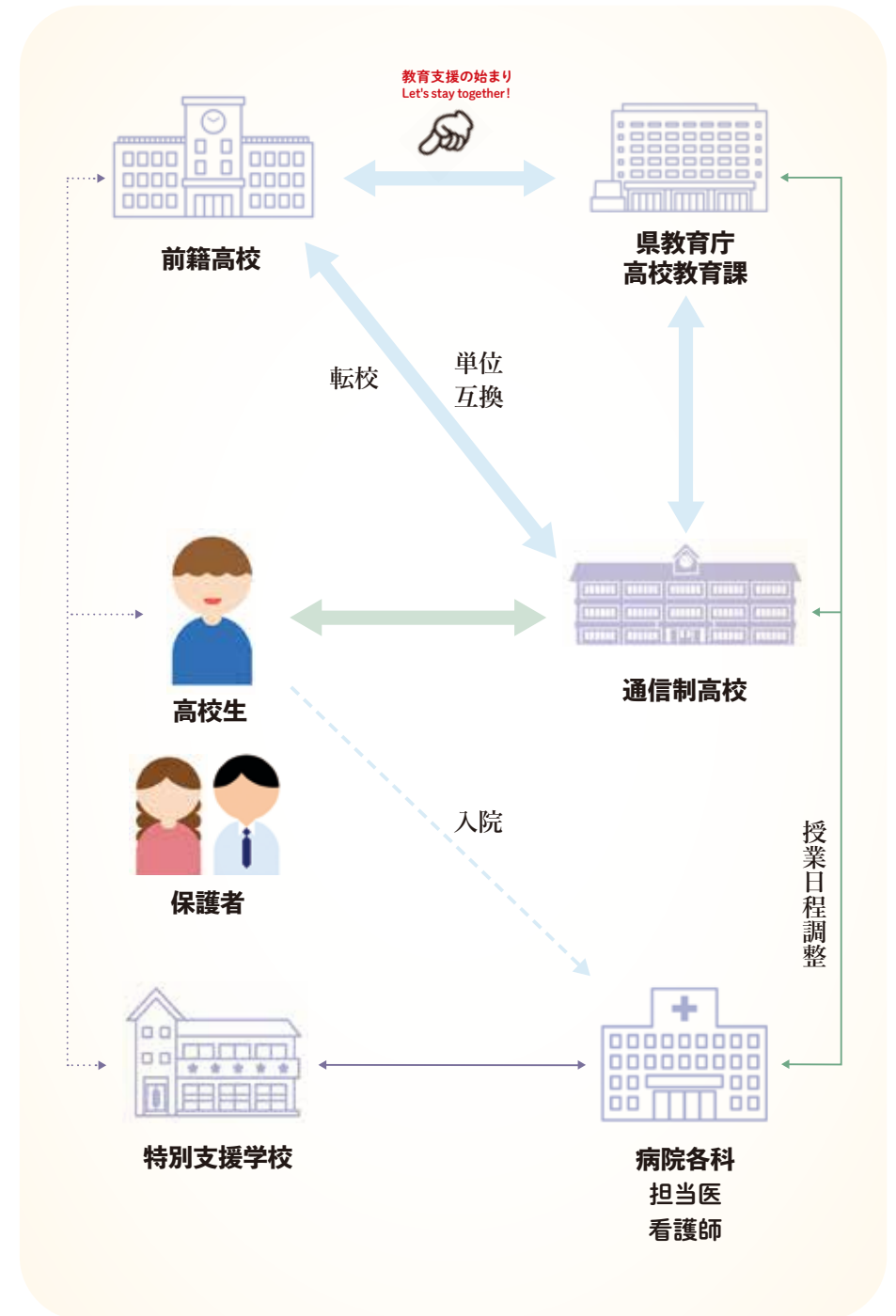
8

県の「がん対策の
推進に関する条例」
に基づき支援策定。
5者会議を
開催して相談

学校間の提携が
県立高校の校長会
などで通知され
周知されている



	内容	制度など
教育連携 窓口	<p>病院: 主治医、院内患者サポートセンター</p> <p>学校: 前籍校の校長・教頭、転校する県立通信制高校</p> <p>行政: 県教育庁高校教育課</p> <p>転校に係る手続きは可能な限り簡略化し、互いの編入学試験は実施しない。</p>	<p>「がん対策の推進に関する条例」に基づき、小児がん患者の入院中の学習や進級、卒業の機会を確保するための策定。入院後に5者会議(本人・保護者・主治医・高校教育課・前籍校・転校先の通信制高校)を実施</p>
連携方法	<p>県立の通信制高校への転校を行い、通信制高校の教諭が来院してスクーリングを実施する。通信制課程による教科・科目の履修を行う。1コマ90分授業時間数は体調など考慮して配分する。併設する特別支援学校中学部教諭なども学習支援へ参画可能である。</p>	<p>県立高校の校長会などで通知され周知されており、対象者が発生した場合には、前籍校と高校教育課との間で転校に係る相談・指導が開始される。</p> <p>小児がん患者・県立高校生に限った支援となる。</p>
学習支援体制	<p>通信制高校の授業</p> <p>場所: 病院内個室、会議室など</p>	<p>連絡会を実施し指導内容などの確認を行う</p>
学習方法	対面式	
単位認定	有(再転校後に、通信制高校での学習状況を前籍校が確認し、前籍校の校長が認定する)	実施できた授業数による
転校の有無	有	





すすむ
進は大家族のにぎやかな家庭で育った元気な男の子です。少しおっとりした性格で、泥だらけになって外で遊ぶというより、家で歴史の本を読んだり、ゲームをして過ごすのが好きでした。お気に入りには東北の武将の話です。将来は、そんな研究ができる仕事に就けたら良いなと思っていました。そんな進が、身体の不調を訴え、大きな病院で検査を受けることになったのは高校2年生になったばかりの頃でした。

通信制高校へ転校（学習支援開始まで）

この県では「**がん対策の推進に関する条例**¹」に基づき、小児がん患者の入院中の学習や進級、卒業の機会を確保するために学習支援を策定しています。

進の診断が確定し、長期入院治療が開始される当初から関係者間で情報提供が始められました。この県は全国的に見て長期入院など病気によって生じる生徒への学習支援に力を入れていて、進も家族

Points 1

正式には平成30(2018)年より開始。県の高校教育課と通信制高校と前籍校、病院（医師、患者サポートセンターを中心として）との連携で実施されている。

も知らなかったのですが、県立高校の校長会では、普段から入院治療中の学習支援方法について通知され、周知をされているということでした。

支援が必要な生徒が確認された場合には、まず在籍校と県教育庁高校教育課との間で転校などの相談や指導が開始されます。

これは小児がんにより長期入院を余儀なくされ、特別な配慮を必要とする、県立高に在籍している生徒への支援で、残念ながら市立や私立の生徒への対応は、これからの課題であり、現在は個別の相談となっているそうです²。

入院で不安な気持ちでいる中、進の通っていたのは県立高校の普通科でしたので、全国の事例と比べると支援がスムーズに決まっていき、後から考えてみると幸いでした。

次に院内に設けられている患者サポートセンターの担当者が在籍高校と転校先の通信制高校との間に入り連絡をしてくれました。

関係するいろいろな方の連絡、調整を経て県教育庁高校教育課の支援により、県立高校から県立通信制高校への転校が実行できました。通信制高校といっても対面式指導も受けられますし、**入院中の学習指導は、退院後の再転校時には単位認定もされますので、進は**

Points 2

この体制の利用対象は県立高校普通科の生徒に現在は限られている。それ以外の場合、特別支援学校のセンター的機能を利用した支援となっている。



復学への意識を強く持つことができ、結果として学習意欲を持続していくこともできました。³

5 者会議、連絡会で支援の方向を確認（学習支援の実際）

入院後には5者会議（本人、保護者、主治医、県の高校教育課、前籍校、転校先の通信制高校）や連絡会が開催され、学習指導を円滑に進めるための協議、指導内容などの検討が行われました。

県の高校教育課により、前籍校の教諭の兼務発令の検討や通信制高校への加配の検討もそのなかに含まれています。

転校した生徒ではありますが、必要であれば前籍校による課題などの学習指導も可能とのことでした。特別支援学校は前籍校からの要望に応じて、支援をしています。

進も家族も生徒に寄り添うことを第一に考えてくれていると感謝の気持ちを持ちましたし、治療中に感じていた高校生活への不安も大きく軽減されたと振り返って思います。

治療、学習支援が始まりました。

通信制課程による教科・科目の履修（レポート提出やスクーリン

Points 3

通信制高校に転校中の学習指導などにより、再転校後に前籍校の校長の判断で単位認定が受けられる。



グなど）が行われていきます。

進の治療に合わせて日程などの確認をしながら、病院内の個室や会議室で、1コマ90分の対面式での授業を行いました。

授業時間数は体調などを見ながら柔軟に調整可能でしたので、体調の変化が大きかった進の場合、たびたび院内の患者サポートセンターが日々の調子や検査日程などにあわせて、検討し連絡を取って調整してくれました。

気持ちでは頑張ろうとしても、身体は付いてきてくれません。時には何度も日程を変えてもらう事もありましたが、その都度すぐに対応してもらえました。折りにふれ、さりげない励ましも感じました。[心理的支援] そんなことが体調のいい時期には遅れた分を取り戻そうと意欲的に学習に取り組めた理由かもしれないと進は思っています。

連絡会が開かれ、注意事項共有（退院時）

長かった入院治療も終わりに近づき、退院に向けた連絡会が開かれました。退院してからの注意事項の共有や、関係者間の連絡継続が確認され、やがて前籍校への再転校の手続きが行われました。



息子の学習への意欲が続いたのは、また前籍校に戻ることができるという説明があったからでした。学校間の連携で子どものことを第一に考えていただき感謝しています。（母）

9

県により常時確保された講師が、在籍校の非常勤講師となり対面授業が受けられた県立高校生

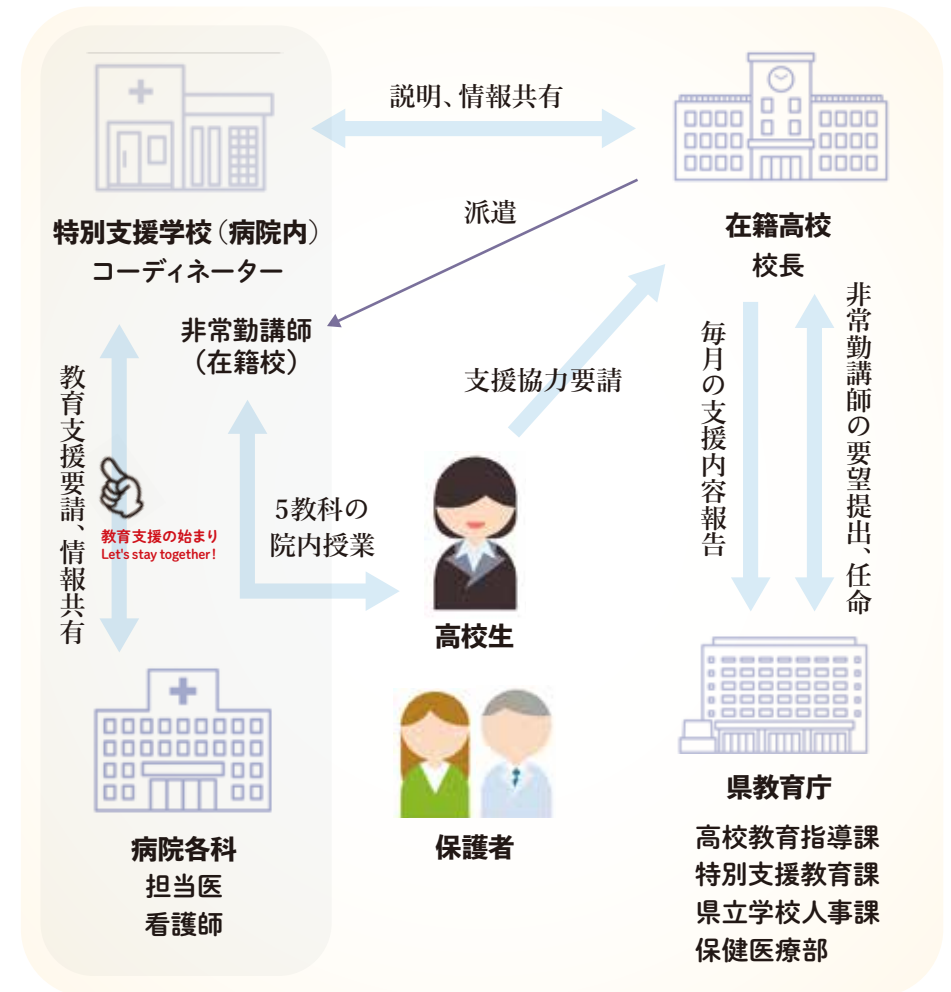
特別支援教育
コーディネーターが
特別支援学校(院内)
に常駐

非常勤講師(在籍校)
5人が5教科を
特別支援学校(院内)
で直接指導

- 公
- 普
- 科
-
- 単
- 位
- 無
- 転
- 校
-
- 対
- 面
-
- 遠
- 隔
- 特
- 別
- 支
- 援
- 教
- 育
-
- 実
- 習
- 支
- 校
- 高
- 校
- 入
- 試
- キ
- ャ
- リ
- ア
-
- 心
- 的
- 支
- 援
-
- 医
- 教
- 開
- 連
- 携
-
- 退
- 院
- 後
-
- 教
- 育
- 行
- 政
- 小
- 病
- 棟

	内容	制度など
教育連携窓口	<p>病院: 医師</p> <p>学校: 在籍校 (学校長、事務長、担任)</p> <p>病院内の特別支援学校 (小・中学部のみ)</p> <p>(学校長、事務長、特別支援教育コーディネーター)</p> <p>行政: 高校教育指導課、特別支援教育課、県立学校人事課、保健医療部</p>	
連携方法	<p>長期入院を要する高校生への学習支援体制検討委員会及び作業部会(年4回実施):</p> <p>上記行政関係機関、病院、特別支援学校で実施。</p> <p>在籍校の「非常勤講師」が院内特別支援学校内に常駐し、直接指導を行う。</p> <p>①支援制度の確立、要綱作成</p> <p>②予算検討</p> <p>③各機関での事業計画、取組の協議</p> <p>生徒在籍校と特別支援学校:</p> <p>①支援開始時: 非常勤講師派遣手続。支援制度の説明、協力内容確認</p> <p>②支援中: 毎月の支援状況報告。配布物や必要な情報の提供</p> <p>③退院時: 医師より今後の注意事項などを説明。配慮事項、要望などの伝達、確認。復帰後の生活に関する協議</p>	<p>『高校生入院時学習支援』</p> <p>①在籍校の非常勤講師による5教科の学習指導</p> <p>②実技・専門教科の課題への取組</p> <p>③支援内容を進級・卒業認定の判断材料</p> <p>④心理的安定と意欲の向上</p>
学習支援体制	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒在籍校指導計画に則った5教科の学習指導 ・実技・専門教科の課題の取組支援 ・定期考査実施(場所: 病室) ・学習支援者: 生徒在籍校非常勤講師(特別支援学校非常勤講師兼務) 	<p>生徒在籍校と特別支援学校の連携</p>

学習方法	対面式
単位認定	有 ベッドサイド授業は授業時数としてカウント。 実技・専門教科の課題と定期考査受験は在籍校の裁量
転校の有無	無
実績	2018年9月に高校生入院時学習支援を開始以降、のべ9名に対し実施し、全ケースで進級・卒業が認められた





ここみは両親と3人家族。小さいころからのんびりやで、おだやかな子でした。

ここみ自身も、勉強やスポーツが得意な同級生と比べると、平凡かなと思いますが、それは、まだ自分の可能性に気付いてないだけ。なんて、ちょっと思ってます。友達も多いし学校も楽しいし、まあまあ充実していました。

そんな日々の中、なんだか身体がだるいな。疲れるなと感じることが続いて、心配したお母さんに連れられて病院に行きました。

院内常駐コーディネーターを中心に（学習支援開始まで）

1ヶ月以上の入院が決まったときに医師から、高校生入院時学習支援の説明がここみと両親にありました。もちろん支援の利用希望をしましたので、医師から**特別支援教育コーディネーター¹**（以下、**コーディネーター**）へ連絡が行き、設定された面談日に、コーディネーターからここみと両親に支援の詳細な説明があり、ここみの希望なども聞いてもらい相談して支援をお願いしました。

Points 1

院内特別支援学校に常駐。その時々²の要望や状況によって、迅速に活動することが可能になっている。



支援を受けたいことや協力要請の連絡を両親から在籍校へ入れてもらい、その後、特別支援学校長が在籍校の校長に連絡して、特別支援学校の非常勤講師でもある高校生支援担当の先生方との面談を調整しました。面談後、在籍校の校長が非常勤講師要望を県教育委員会に提出して任用が発令し、待ち望んだ支援が始まりました。

在籍高校の先生方も、はじめての学習支援でしたので、その取り組み方や双方向通信に必要なこと、方法をコーディネーターが高校に出向き、今回のニーズに合わせた説明やデモンストレーションを行って理解を深めていきました。

また、**実技教科や専門教科の学習支援²**（ベッドサイド授業）が無いので、ひとりで出来る課題を出してもらうことやインターネットを使った遠隔授業の可能性を協議してもらうようお願いをしました。他校で実施された事例を説明すると協議が進むことが多いようです。

高校の非常勤講師がベッドサイドで授業（学習支援の実際）

コーディネーターが生徒の病状や治療計画、配慮事項などを医師から聞き、授業担当者間で情報共有を行いました。そして在籍校の担任に5教科の教育課程と授業計画書、貸出可能な教科書を送って

Points 2

実技教科・専門教科の単位取得は、課題に取り組む生徒自身の努力によるところが大きい。遠隔授業により改善が図られたが、かつては在籍高校の了承を得るのは難しいこともあった。しかし、双方向通信が一般的になった現在では、遠隔授業に対する理解が進み、今後は5教科以外の授業参加、単位認定が容易になることが期待される。

もらい、準備が進んでいきました。

ここみの体調を見ながら、高校の非常勤講師が高校の授業計画に合わせて**在籍高校と同じ時間数の5教科のベッドサイド授業³**を行い、送付されたプリントがあれば、それを使って授業を進めます。定期考査が受けられる場合は高校と事前に調整をしてから病室で実施し、答案を高校へ届けました。

実技・専門教科の課題が出されたときに、ここみはひとりで取り組みましたが、ひとりでは課題をするのが難しい生徒は特別支援学校の先生と一緒に取り組んでいました。

病室ではできない美術や音楽、実習に取り組む必要がある場合は、医師の許可と保護者の要請を受けてから、生徒が特別支援学校に来て行うこともできるそうです。

また、生徒がストレスを軽減したい、心理的安定を図りたい、意欲の向上（気分を盛り上げたい）を希望すれば、自立活動の視点から特別支援学校の施設利用が許可されています。**[心理的支援]**

ここみは、思っきり歌いたいことが時々あって、少しですが利用していました。歌い終わった後は爽快感いっぱいになりました。

支援の状況は月毎に在籍校に報告され、在籍校から高校教育指導

課に報告されます。報告内容は、支援実施日数、各教科の授業時数、学習内容とその取り組みの様子です。これが積み重なって制度の改善、発展など新たな患者への支援に活かされていきます。

退院後の学校生活について話し合う（退院時）

退院の可能性が出てきました。ここみ、家族が退院後に安心して安全に過ごせるよう、情報交換会を開催します。参加者は、ここみと両親、医師、在籍校の管理職、担任、養護教諭、特別支援学校のコーディネーター、養護教諭です。

在籍校の先生方に学校生活上の配慮事項と要望を伝え、医師から現在の状態、注意すべきことの説明があり、ここみと両親も心配していることやお願いを話しました。

その要望に関して、在籍校はどのような対応が可能か、持ち帰って協議されました。**[退院後配慮]**特に退院当初の通学方法、校内での移動時の注意点、まわりの人々の病気への理解と配慮、緊急時の対応の仕方の準備は重要です。これらを確認することで、受け入れる在籍校にとっても、ここみや家族にとっても、安心して勉強できる環境が整うことになります。

Points 3

在籍校の非常勤講師5人が院内特別支援学校内に常駐し、5教科の直接指導を行う全国でも稀な事例^{*}である。



*このような学習支援制度は、他県での実施例は無いようです。しかし、限定した病院に入院している高校生のみが対象で、人件費や備品費などがネックとなっているようです。これから、もっと広まって欲しいと願っています。(母)

実習授業に代わる 課題提出により 単位取得ができた 県立商業高校生

10

県内で初めての
商業高校生への
実習科目を含む
学習支援

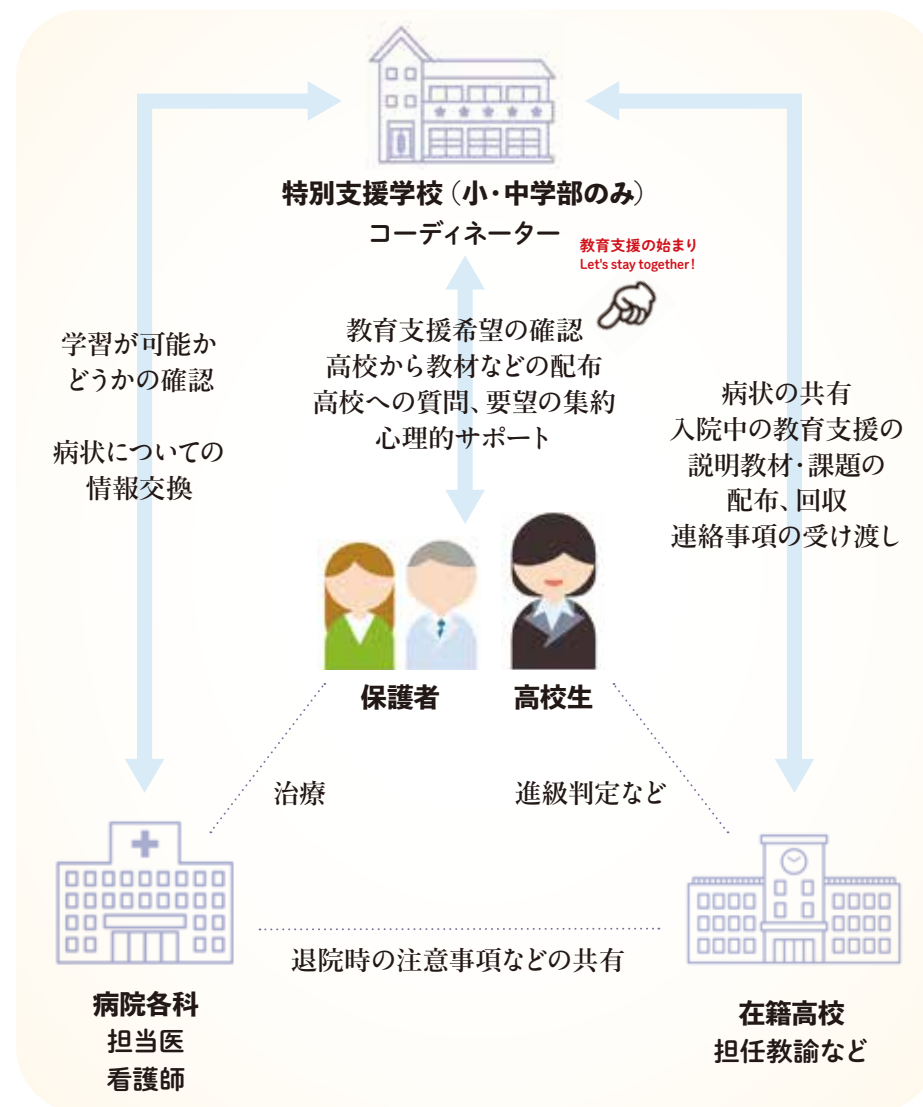
転校を行わず
在籍のまま高校の
学習支援を受けて
単位取得



公
商
科
○
単
位
無
転
校
○
対
面
○
遠
隔
○
特
別
支
援
○
実
習
実
技
高
校
入
試
キ
ャ
リ
ア
○
心
的
支
援
○
医
教
師
携
○
退
院
後
○
教
育
委
行
政
小
病
種

	内容	制度など
教育連携 窓口	病院 : 医師 学校 : 生徒在籍校 (学校長、事務長、担任) 院内特別支援学校 (小・中学部のみ) (学校長、事務長、特別支援教育コーディネーター) 行政 : 高校教育指導課、特別支援教育課、県立学校人事課、保健医療部	
連携方法	長期入院を要する高校生への学習支援体制検討委員会及び作業部会〔年4回実施〕 : 上記行政関係機関、病院、特別支援学校で実施。 在籍校の「非常勤講師」が院内特別支援学校内に常駐し、直接指導を行う。 ①支援制度の確立、要綱作成 ②予算検討 ③各機関での事業計画、取組の協議 生徒在籍校と特別支援学校 : ④支援開始時: 非常勤講師派遣手続、支援制度の説明、協力内容確認 ⑤支援中: 毎月の支援状況報告。配布物や必要な情報の提供 ⑥退院時: 医師より今後の注意事項などを説明 配慮事項、要望などの伝達、確認。通学再開後の生活に関する協議	高校生 入院時 学習支援
学習支援 体制	・在籍校の指導計画に則った5教科の学習指導 ・実技・専門教科の課題の取組支援 ・定期考査実施(場所: 病室) ・学習支援者: 生徒在籍校非常勤講師 (特別支援学校非常勤講師兼務)	

学習方法	対面式
単位認定	有 ベッドサイド授業は授業時数としてカウント 実技・専門教科の課題と定期考査受験は在籍校の裁量
転校の有無	無





家族で雑貨店を営む家に育った由佳は両親が働く姿を見て育ちました。お客さんと会話するのが大好きで、自分も何かお店を持って、そこで働きたいという夢を持つ高校生です。高校進学は商業科を選びました。お母さんを手伝って帳簿をつけたりしていましたから、入学後も自分に合っていると感じ、楽しい高校生活を送っていました。しかし、ある時から微熱が続くようになり病院で検査を受けることになりました。

商業科の生徒への学習支援（学習支援開始まで）

由佳の学習支援を考えたとき、この県で実施している高校生入院時学習支援では5教科以外の科目の学習保障がないため、その点をどのように解消していくかが課題でした。

普通科の実技教科では出された課題を提出することで単位が認定されましたが、実習を通して学ぶ職業科の教科は、出された課題にひとりで取り組むだけでは十分とはいえず、**単位の認定も難しいと**

Points 1

後述のように生徒本人の普段からの努力と教諭の熱意で、インターネットを使った単位取得への道が開けた。授業職業科（商業科）に在籍する生徒への学習支援は県内で初の事例であった。

思われた¹ので、遠隔授業システムを使い、入院中の生徒はパソコンを通して他の生徒と同様に実習するという提案をしましたが、この時点では遠隔授業の了承は得られませんでした。

県立高校・特別支援学校対象の高校生入院時学習支援と同様の準備が進められ、在籍校からは「5教科の単位認定の可能性はあるが、実技・専門教科は実習が中心で授業に参加できなければ単位認定されないので、留年を覚悟してください」という話が、由佳と両親、特別支援学校にありました。由佳は何年かかっても在籍校を卒業したいという気持ちが強くありましたので、その時は留年を覚悟するしかありませんでした。

在籍高校の生徒のままで（学習支援の実際）

由佳は入院してからも5教科の学習支援に対して真摯に取り組み、入院生活の中、何とか毎回の課題も提出して定期テストも好結果を出し続けました。

在籍校の担任は頻繁に学校の配布物を病院に郵送してくれました。定期テストの時も答案用紙を持参し、コーディネーターに託して、再び来院して由佳の回答したテスト用紙を持ち帰りました。



病院内でのリハビリによって実技単位認定された例があったと聞きました。（母）
好事例2（37ページ）
好事例4（52ページ）

また、由佳の体調が良いときには、スマートフォンのビデオ通話を使って学校の最近の様子などを伝えてくれる熱心な先生です。[心理的支援]そして、実技・専門教科担当の先生方と何とか単位認定が可能になる方法がないかと探してくれていました。

入院前から由佳は成績が良く、積極的に資格試験にも挑戦して、いくつもの資格を取得し県からも表彰されるような模範的な生徒でした。そこで、病院内での学習支援への取り組み、今までの高校生活の様子、在籍校を卒業したいという由佳の熱意、先生方の生徒に対する想い、これらを合わせて検討する話し合いが行われ、2学期末に実技・専門教科の課題が出されることになりました。

その知らせを聞いた由佳と両親は、とびあがって喜びました。学習支援を受ける生徒にとって、同級生と一緒に卒業したい気持ちが常にあり、何よりも学習意欲が湧くことです。

かなりの課題量で由佳も少し心配でしたが、望んでいたチャンスです。課題も生徒自身で取り組みやすいように工夫されていたこともあり、がんばって2月中旬には、ほぼ課題を終わらせました。

また、実技科目の定期テストも用意してもらえたため、病室に

Points 2

「原価計算」「ビジネス情報」「企業分析」が遠隔授業で実施された。



パソコンを持ち込んで遠隔授業で実施され²、(この遠隔授業にはGoogleのアプリのclassroomが使用された)課題とテストの結果は、2月末の卒業・進級認定会議に間に合い、晴れて念願の進級が認められました。

治療にも好影響だったもの(退院時)

由佳と両親、在籍校が情報交換会を実施して、退院後の高校生活が安心して安全なものになるよう、いろいろなケースを想定して話し合いが行われました。

結果的に、生徒や関わる人たちの想いが単位認定につながった事例となり「入院しているから」「授業に参加できないから」とあきらめるのではなく、入院中でも行えることがあることを理解して、それぞれの立場でできることをやり、可能性を追求したことが実を結びました。

また、在籍校とのつながりを実感でき、入院していても学習が続けられているということが気持ちの安定と学習意欲の向上を生み、治療にも好影響をもたらしたと思われます。[心理的支援]



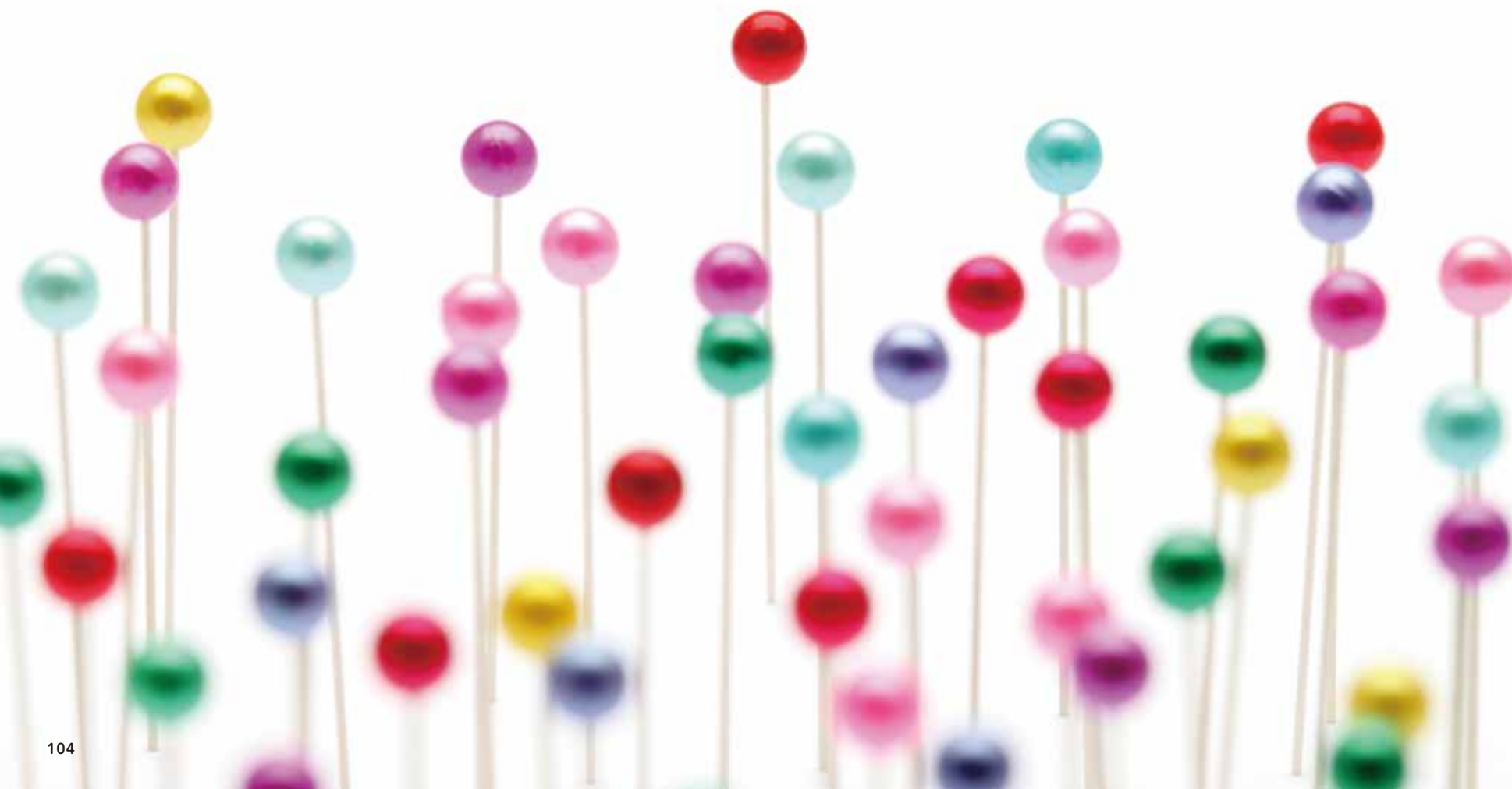
このような事例を在籍校と共有できれば、いろいろな対応が進むと思われます。学習支援が実現するようにコーディネートする際は、支援のノウハウと併せて、その効果も伝え、協力を要請すると支援がよりスムーズに進むと思われます。(学習コーディネーター)

病室内での実習課題に
取り組む環境を整え
単位を取得した
県立服飾学科高校生

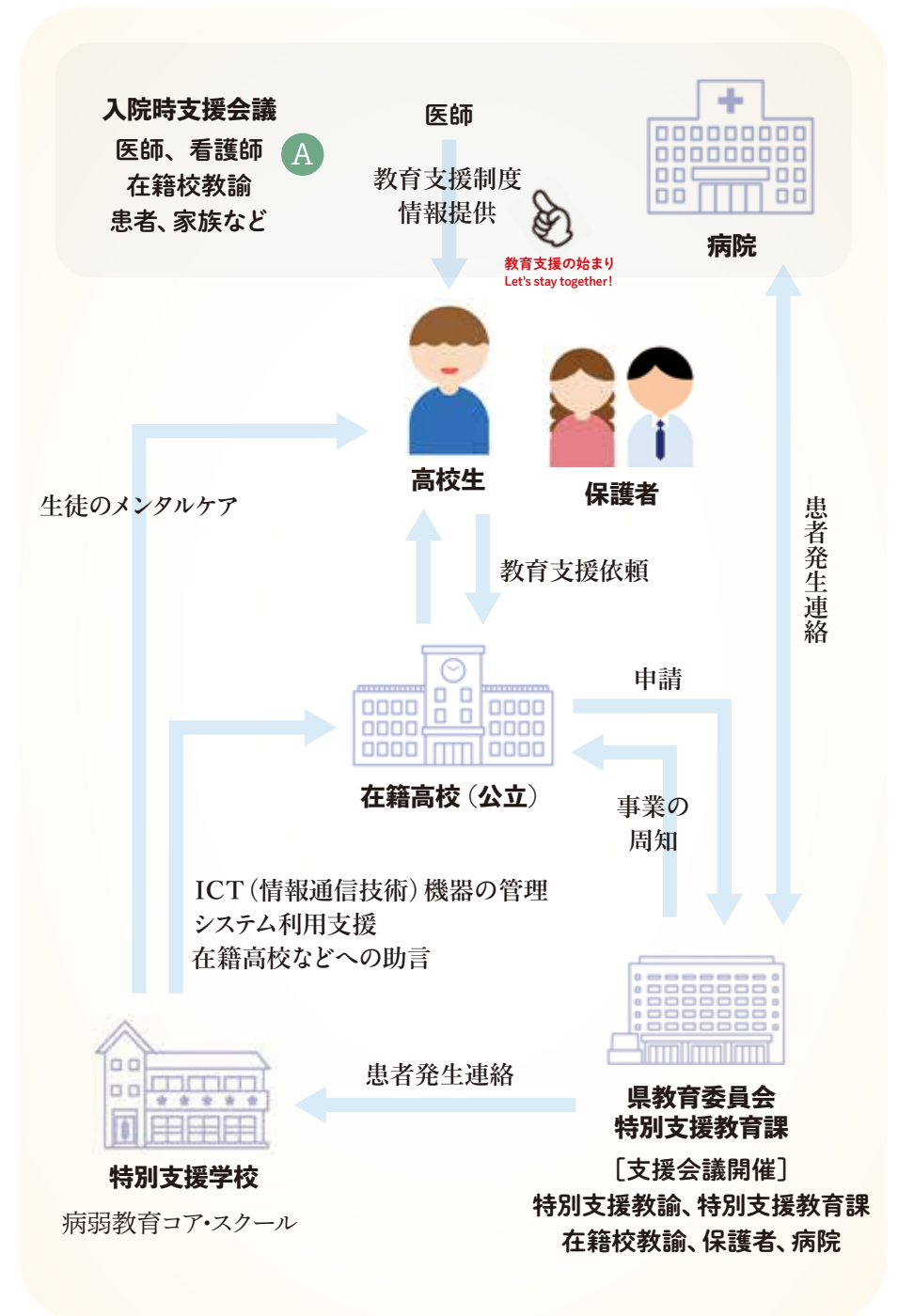
11

県教育委員会の
事業として
2018年から
教育支援を開始

服飾科実習のため
病室にミシンを
持ち込み制作



	内容	制度など
教育連携 窓口	病院 : 医師 学校 : 在籍校校長 行政 : 県教育委員会(以下、県教委) 特別支援学校	
連携方法	1. 診断時 医師/患者家族に教育支援を紹介し、県教委にメールで支援対象者発生を連絡 家族/在籍校に教育支援依頼を行う 学校/県教委に対象者発生を連絡 県教委/特別支援学校に依頼 特別支援学校/遠隔教育システム利用支援と在籍高校などへの助言	県がん対策推進事業 連携会議 県教育委員会の事業
学習支援 体制	2. 入院時支援会議 A 担当医、看護師、リハビリ、在籍校(担任、教頭、養護教諭)、患者、家族らが出席 病状、治療計画、支援について情報共有	
	3. 退院時支援会議 参加者は入院時と同じ	
学習支援 体制	遠隔授業 /在籍校にビデオ撮影機器、病室にPC、iPad 学校の通信環境 /県のTV会議システム 学習場所 /病室(個室)、病院のWi-Fiに接続	県教育委員会 ICT推進室から各学校にタブレットやモバイルルーターが配布される
学習方法	遠隔授業 服飾科では実習が必要であるため病室にマシンを持ち込み、制作を行う	
単位認定	有	在籍校の判断により、進級の決定(教務内規による)
転校の有無	無	





両親がテーラーを営んでいる環境で育った陽志は、小さい頃から仕事場の隅で、仕立て道具に囲まれて遊んでいました。両親の働く姿から服を作ることに興味を持ち、将来はファッションデザイナーになりたいと高校は服飾科に決めました。充実した高校生活でしたが、体調変化を訴えることが多くなり病院で検査を受けることになりました。

県の教育委員会が主体となり支援実施（学習支援開始まで）

診断が確定し、入院治療に入るため関係者での話し合いの席が設けられました。

この総合病院は各診療科の風通しがよく、横の連携もあり高校生のがん患者の入院情報を把握しやすい環境でした。

担当医は、陽志や家族に現在の教育支援状況について説明しました。まず患者や家族が在籍高校に教育支援を依頼、高校は県の教育委員会（以下、県教委）に教育支援を要する生徒が発生したことを連絡し、県教委が特別支援学校に遠隔授業の設定を依頼します。特

Points 1

県がん対策推進事業連携会議（年1回開催）の場で、委員（小児科医）が入院中の高校生に対する教育支援についての問題提起を行った。会議には県の教育委員会（教諭）が出席しており、提起を受けて1年かけ協議、準備を行い、県教育委員会の事業として2018年に教育支援を開始した。

別支援学校は高校に出向いて遠隔教育機器の説明などを行うという手順です。

この県の入院中の生徒への教育支援は、県教委が主体¹となって在宅の寝たきりの生徒への訪問授業や遠隔授業の実績があった特別支援学校に委託して始まりました。

以前は県立高校のみが支援対象でしたが、市立や私立高校への支援も広がっています。しかし学校により対応が異なり^{*}、これからの課題となっています。

開始当初は、出席確認のため生徒側に教諭の立ち合いが必要で、県教委が在籍校のOB教諭やアルバイトの教諭を雇用して病院に派遣していましたが、教諭の確保や費用などの問題から立ち合い不要になるなど改められてきて、現在では大学病院をはじめとして県内の病院と県教委の提携も開始され支援が行われています。

陽志の場合は転校せず、病室で高校の授業をインターネットの遠隔授業で受けることになりましたが、将来はファッションデザイナーになりたい彼が一番不安だったのは、高校の実習授業が入院によってどうなってしまうのだろうか、ということでした。

入院早々、担当医や看護師、リハビリ担当者、在籍校（担任、教



*校長の理解を得ることが必要です。医師が学校に出向き、すでに県立高校での教育支援が進んでいることを説明し、プリントなどの課題提出で単位認定の工夫をしてもらった例もありました。支援開始までに時間を要する事例が多くあります。（医療スタッフ）

**双方向通信での遠隔授業について、生徒側に教諭などの立ち合いがなくても単位認定されるとの通知（2019年11月、文部科学省）が出された。

頭、養護教諭)、陽志、家族らが出席する入院時支援会議が開催されました。

病室での実習を実現 (学習支援の実際)

担当医から、病状や入院を要する期間、治療の概要などの情報提供があり、高校側への学習支援依頼とその具体的な方法について、いろいろな話し合いが行われました。

担当医と病棟スタッフは、授業に合わせて治療や検査時間の調整を行いました。教室と病室をつないでのインターネットでの授業の準備はできましたが、問題は陽志も心配していた服飾実習です。

ここで病棟スタッフから、**小型のミシンなら病室に持ち込める²**のではないかとの提案がありました。入院中でも高校の授業を受け続け、卒業してほしいという関係者の気持ちが表れた、この提案は間もなく実現しました。

ほかにも配慮されてきたのは、クラスメートとのつながりを守るため、入学式や始業式、終業式、卒業アルバム写真撮影などの日には可能な限り登校できるように調整することや、生徒が脱毛などの外見の変化を気にする場合がありますので、教室の画面に本人が顔出し



この県の私立学校は、かつて制度の対象外であった。近県の病院に入院した私立高校の生徒の例では、校長が協力的で理解があり、自ら県教委に出向いて、その方法を模索することで支援教育が実現した。この県で初めての私立高校支援例となり、高校は所有するカメラとWi-Fi環境を使用、生徒がルーターとパソコンを準備した。2021年度より、さらに支援を広げていて、市立も対象となっている。(医療スタッフ)

しなくてもいいような設定をすることなど、思春期の生徒にとって、入院生活を送る上でとても大切な支援を関係者が積み重ねてきたことを知り、陽志も両親も深く感謝をしました。**[心理的支援]**

転校せず、この高校で学んで将来はファッションデザイナーになるという夢をモチベーションにして陽志は入院生活を続けました。

「病気の人を元気にする服とは」「病院のスタッフが働きやすい服とは」など、入院する前とは違った視点でデザインをとらえることも多くなりました。

入院時と同じ参加者で退院に向けて支援会議 (退院時)

退院が近づき、退院時支援会議が開催されました。

参加者は入院時支援会議と同じで、現在の身体状況や通学可能な時期、退院後の通院頻度、配慮を要することなどが担当医から伝えられ、通学してからの校内での移動や設備などのことも注意点として共有されました。病弱教育コア・スクールからは、県で作成している「支援マニュアル」をもとに教諭や級友が気をつけることなどを指導助言し、退院後もコア・スクールに相談ができるような態勢の説明がありました。**[心理的支援・退院後配慮]**

Points 2

服飾科実習のため病室にミシンを持ち込み制作。病室は個室であったため実現しやすかったが、病室にも限りがあり、学習場所の確保が課題としてあげられる。

12

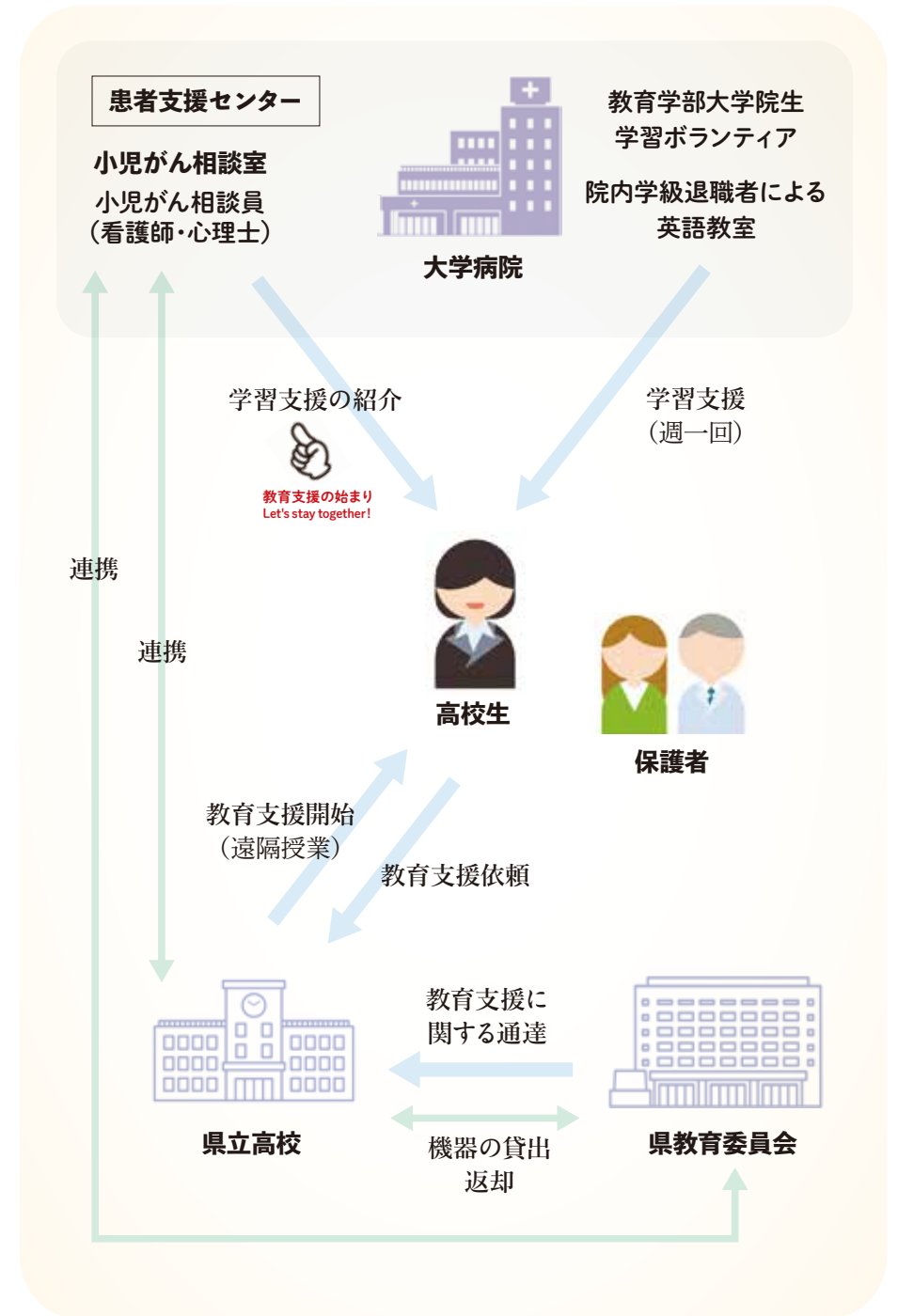


県教育長のトップダウンで
在籍校から
遠隔授業を提供された
県立高校生

県教委から
全ての県立高校に
入院時教育支援の
奨励を通達

遠隔授業に使用の
機器、通信費は
県予算から支出

	内容	制度など
教育連携 窓口	病院：医師 学校：在籍校校長 行政：県教育委員会（以下、県教委）	県教委が県立高校に教育支援についての通達を出している
連携方法	高校生が入院すると院内の患者支援センター内にある小児がん相談室に連絡が入る 小児がん相談員（看護師）または心理士から患者、家族に対して教育支援制度について説明 家族：在籍校に教育支援依頼を行う 学校：教育支援開始	
学習支援 体制	遠隔授業／OriHimeを使用。機器、通信費は県予算から支出 学習場所／病室（大部屋）、学習室もあり	遠隔授業時に生徒側に教諭の立ち会いがなくても出席認定されると県教育長から通知
学習方法	遠隔授業 教育学部大学院生の学習ボランティアによる支援（週1回、1～2時間程度）	
単位認定	今のところ、単位認定について明確な取り決めはない。出席日数は問われない扱いになっており、テストは1回でも受けていけば可で、テストが受けられない場合でも課題提出などで補っている。通学再開後に集中的に補習を行うことで対応	在籍校の判断により、進級の決定（教務内規による）
転校の有無	無	





晶あきは小さい頃から本が好きな女の子でした。友達の中で遊ぶより、ひとりで綺麗な絵本の世界に入って遊ぶほうが好きでした。本は一冊ずつ違って、どれもが晶をドキドキさせてくれます。そんな物語を創れる人になりたいとおぼろげに思っていました。そんな晶に、中学2年生のころから体調の異変が起こり、高校合格後に入院生活に入りました。

高校生の入院情報を素早く把握（学習支援開始まで）

晶が入院したのは大学病院でした。小児科以外に入院している高校生がん患者の把握は難しいとされていますが、この病院では院内がんセンターなど多診療科の情報を知る仕組みがあり、普段から小児科医が教育支援制度を紹介するなど、各診療科への制度周知が行われていて、高校生の入院があると院内の患者支援センター内にある小児がん相談室に連絡が入ります。

学生への教育支援制度の案内は、小児がん相談室の小児がん相談

Points 1

この県の教育支援事業は、県教育長の指示により2019年から開始された。



員（看護師）や心理士が行っています。

晶は説明を受け、ぜひ教育支援をお願いしたいと思いましたが、両親から在籍校に依頼をしました。

この県では、すべての県立高校に県教委から教育支援奨励の通達が届けられているため、支援の周知が行われており¹、高校側は家族の依頼を受けてから支援を開始します。

晶が入学したのは県立高校でしたが、市立高校の場合は管轄が市教育委員会であり、県立高校ほどは周知されていないので小児がん相談員、心理士から支援実績のある高校の事例を紹介するなどして、市立高校側に理解を求めて支援の実現につなげているようです。私立高校については、残念ですが支援事例がない状況です。

たくさんの支えに後押しされて（学習支援の実際）

晶が入院した大学病院と在籍高校は遠く離れていましたので、病院まで教諭が出向くことは難しく、さらに訪問教育や課題提出の支援制度が存在せず、支援方法は遠隔授業のみでした²。

担当医や病棟スタッフは、授業に合わせて治療や検査時間の調整を試みしていますが、どうしても調節しきれないときが出てきます^{*}。

Points 2

遠隔授業に使用の機器、通信費は県の予算から支出された。

*カリキュラムの策定問題の解決のため、病院での参加状況をみながら在籍校と授業調整を行う担当者が必要である。

そんな時は、いったん遠隔授業を中断してパソコンなどをもって検査室に行き、検査が始まるギリギリまで、そこで続きの授業を受けるなどして勉強を続けました。

高校入学時には、晶は入院中でしたので入学式にも出席できずに寂しい思いをしたと級友に話したことがあり、それを聞いた担任のアイデアでクラスメートの自己紹介と顔写真が付いた寄せ書きが晶にプレゼントされました。**[心理的支援]**これには晶も大感激して暗記が出来るくらい何度も何度も読み返し、遠隔授業で顔が映るたび、その子を書いた文字のクセまで、すぐ目に浮かぶくらいでした。

遠隔授業は OriHime^{*} を使用しました。授業が始まる前に分身ロボットを職員室から教室へ持ってきたり、教室を移動したりするときに持ち運ぶ担当はクラスメートの当番制でした。

この OriHime の分身ロボットは、うなずいたり、手を上げる、振るなどの操作ができて、みんなの中では、まるでそこに晶がいるような認識が生まれ、体調不良で晶がしばらく遠隔授業に参加できなかったときには、教室に分身ロボットの姿がない日が続きましたので、級友から晶の姿がないと心配する声があがったほどです。

このように入院生活を心配してくれるいろいろな人の気持ちが、



遠隔授業で教室を映す際、同級生の顔が病院の生徒の画面に映り込んでしまうのを「プライバシーが守れないため不可」という学校があると聞きましたが、むしろクラスメートのほうが、同室の患者さんとの積極的な交流を希望する機会が多く、これは杞憂と感じました。(母)

晶のモチベーションとなり勉強や治療に向かっていく後押しになりました。**[心理的支援]**

この大学病院の特長である教育学部大学院生の学習ボランティアによる支援(週1回、1~2時間程度)は、実際に接して勉強を見てくれる良さはもちろんですが、大学進学希望の晶にとって、大学生活について具体的なイメージを持たせてくれる、楽しく忘れられない思い出でした。**[心理的支援・キャリア教育]**

学生に寄り添った退院後の支援(退院時)

いよいよ退院に向けた説明会が開かれ、退院後の支援方法についての説明が行われました。

遠隔授業による支援は、原則として入院患者が対象ですが、それぞれの状況によって在宅でも行われている例が多くあります。

遠隔授業に使っていた機器は、退院時に返却する必要はなく退院後に体調の問題などで、すぐには登校できないときのことも考え、在宅での遠隔授業のために引き続き使用できるなど、学生の側に沿った支援方法の説明をいくつか聞いて、晶の抱いていた退院後の不安も少し和らぎました。**[退院後配慮]**

* OriHime

オリイ研究所が開発したコミュニケーションロボット。
(12ページ)
<https://orihime.orylab.com>



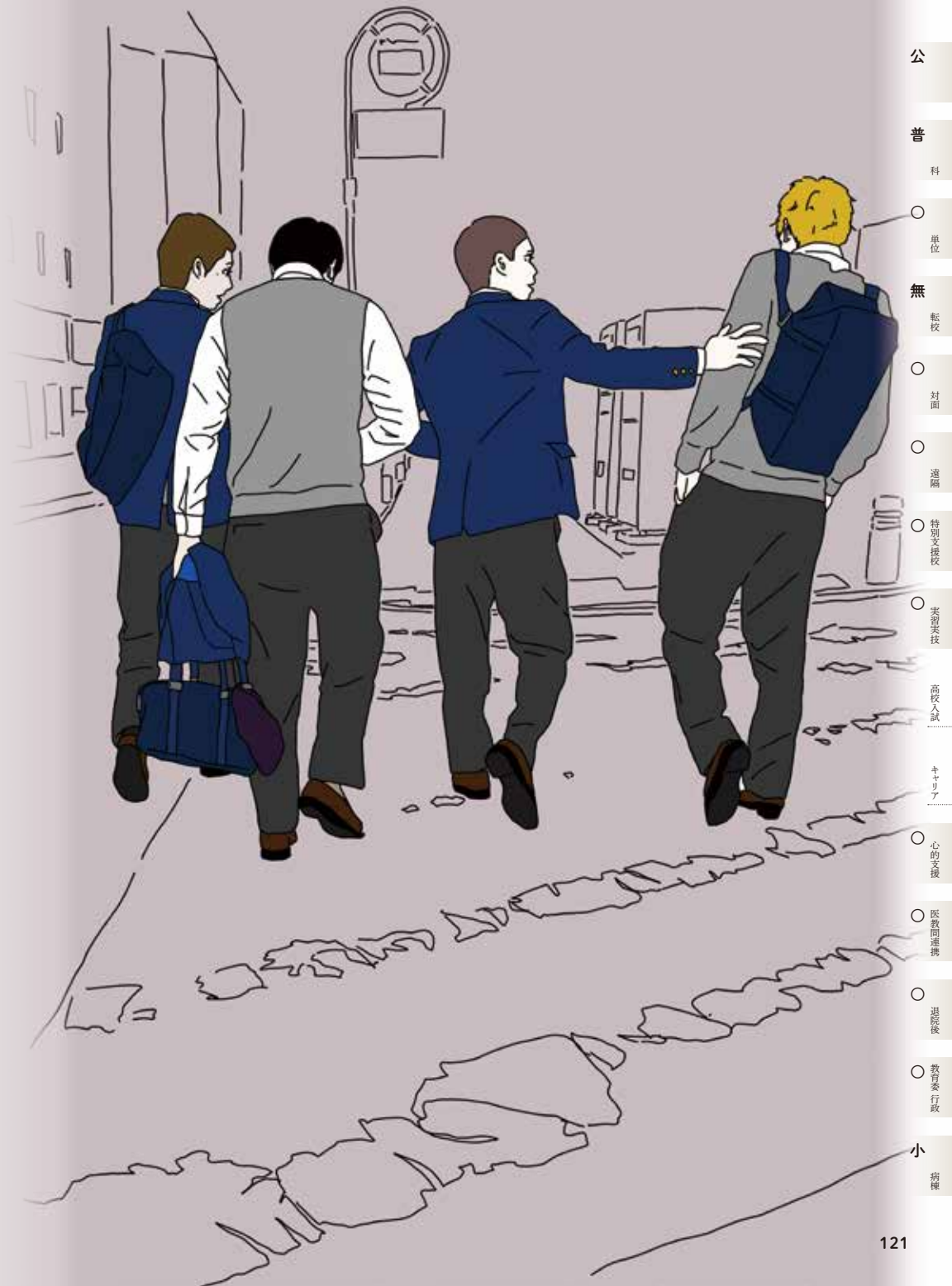
授業の際に配られるプリントが pdf に変換されて、パソコン画面に表示されるようになるなど、遠隔授業の活用方法は拡がってきている。

在籍校の遠隔授業と 支援学校の訪問授業で 単位を取得した高校生

13

特別支援学校が
行う在籍高校への
説明の場に
多くの教諭参加を
要請

遠隔授業に加えて
支援学校による
主要5教科、
週5時間の
訪問授業を実施



公

普

科

○

単

位

無

○

対

面

○

遠

隔

○

特

別

支

援

○

実

習

実

○

高

校

入

試

○

キ

ャ

リ

ア

○

心

的

支

援

○

医

教

育

連

携

○

退

院

後

○

教

育

行

政

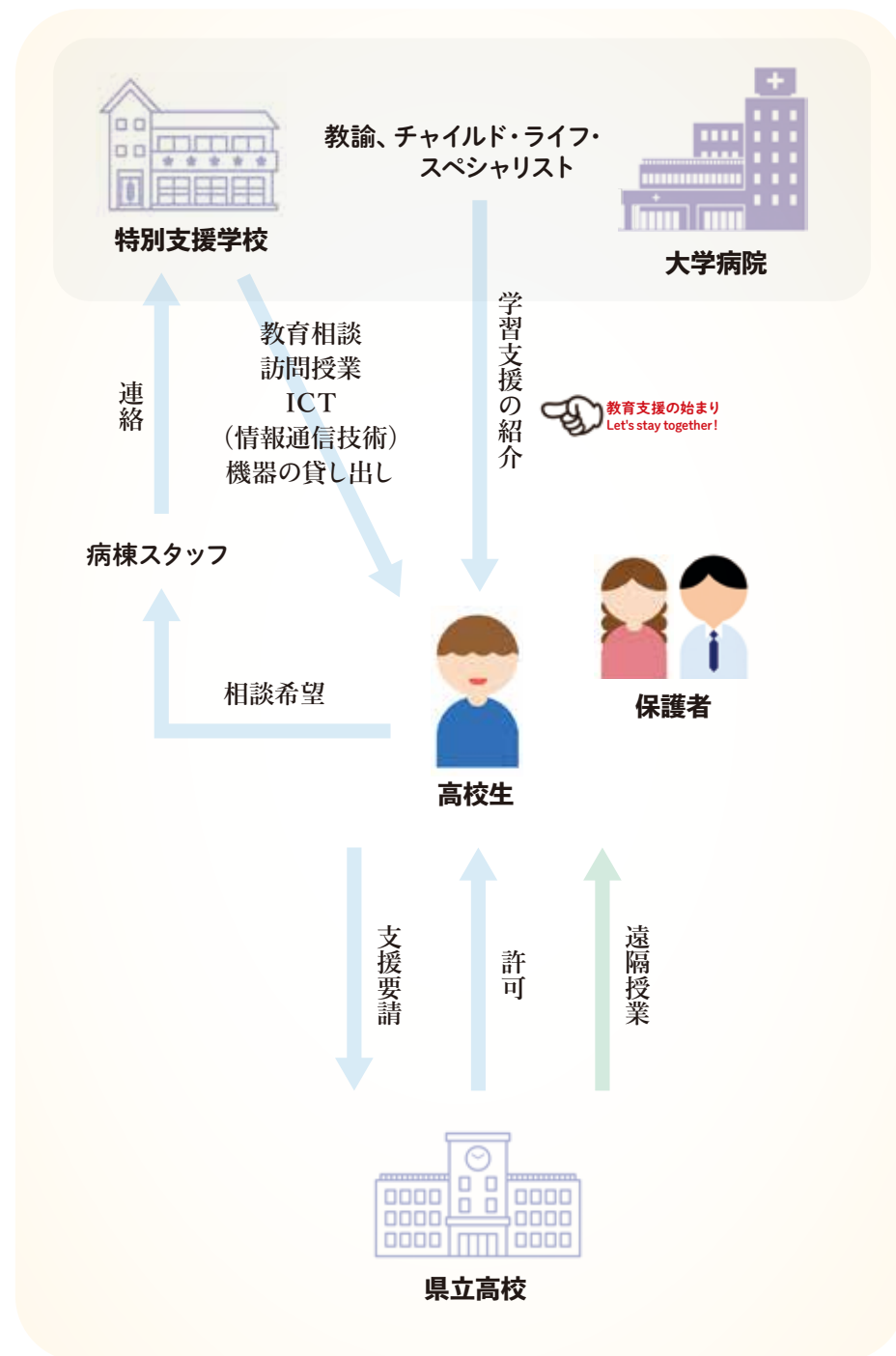
小

○

病

種

	内容	制度など
教育連携 窓口	病院：医師 学校：在籍校校長 行政：県教育委員会	
連携方法	1.入院時／チャイルド・ライフ・スペシャリストから患者・家族に教育支援に関する情報提供を行う。 特別支援学校教諭2名が在籍高校に出向いて調整を行う。(詳細はポイントに記載) 2.退院時支援会議／在籍校の教諭にも参加を依頼	県教育委員会事務局 特別支援教育課 特別支援学校高等部 学習支援担当(教諭2名)
学習支援 体制	学習場所／病室(個室・大部屋)、小児科病棟内ティーンズルーム(予約制) 遠隔授業／ティーンズルーム(予約制)でTV会議システムを利用。書画カメラ、iPad、ポケットWi-Fiを利用した。 kubiは特別支援学校備品として購入	
学習方法	訪問授業／在籍校のカリキュラムに応じた授業を特別支援学校高等部が提供する。1コマ45分授業を週5時間(主要5教科) 遠隔授業／主要5教科の他、芸術、家庭、情報、保健などの実技科目にも対応	
単位認定	有	在籍校の判断により、 進級の決定(教務内規による)
転校の有無	無	





輝^{てる}希は、幼稚園に通う前から近所を走る小さな電車が大好きでした。電車に向かって手をふると運転士のおじさんが警笛を鳴らしてくれるのがとっても嬉しくて、毎日のように見に行っていました。少し大きくなってからは遠くまでいろいろな鉄道を見に出掛けるようになっていましたが、そんな小旅行に行った帰りに足が痛くなり、しばらくしても痛みは取れませんでした。

高校に在籍したままの支援を希望（学習支援開始まで）

輝希が入院した大学病院には、特別支援学校の院内教室が設置されていました。

県内の小児がん患者の多くがこの大学病院に集約されてきていて、^{*}まず特別支援学校教諭とチャイルド・ライフ・スペシャリスト^{**}が輝希と家族に対して教育支援制度の案内や教育相談の場を設けてくれました。

説明では高校を休学した場合、復学はできるが、いったん学籍名

Points 1

管理職（校長か教頭）、教務主任、担任、学年主任、養護教諭、特別支援コーディネーター（この県では各校に常駐。教諭が兼任）などできるだけ多く参加してもらうことが重要である。

*小児病棟以外の病棟に高校生が入院した場合の把握が課題となっている。

簿からは抹消されてしまうので、かえって教育支援を受けにくくなり、同級生とのつながりも切れてしまって復学しづらくなった例があるということでした。

在籍を続けて1単位でも取得できれば、仮に退学という結果になったとしても、高等学校卒業程度認定試験受験の際に試験科目を減らすことができます。それに在籍を続けることで学校側に支援の意識を高めてもらうことも期待できるなど、いろいろな説明を聞きました。

何日かかけて両親と相談のうえ、高校に在籍のままでの支援を希望することにしました。

まず、病棟スタッフを通じて特別支援学校の担当者と支援を希望する教科やその時間数などについて相談し、両親から在籍校に学習支援希望の連絡をしてもらいました。

この高校では、輝希が初めての入院教育支援希望者で、すでに対応の検討は始めていましたが、正式に両親からの連絡を受けて改めて会議が開かれ教育支援が決定し、特別支援学校の教諭2名が在籍高校に出向いて支援内容についての協議を行いました。

特別支援学校は、このときに在籍高校に多くの教諭を集めてもら

チャイルド・ライフ・スペシャリスト協会
<https://childlifepespecialist.jp/>



**チャイルド・ライフ・スペシャリストとは、医療環境にある子どもや家族に、心理社会的支援を提供する専門職。子どもや家族の精神的負担を軽減し、主体的に医療体験に臨めるようサポートを行う。

ったうえで説明することにしています¹が、ここが教育支援全体を円滑に進めるポイントとの考えで、あまり他県には見られない取り組みのようです。

在籍校がカリキュラムを決めたほうが、いろいろとスムーズに運ぶこともあり、教務内規に従い在籍校側にカリキュラム作成をしてもらうことになりました。

訪問+遠隔のハイブリッドで (学習支援の実際)

支援教育が始まってからも特別支援学校が中心となって病院と在籍校の橋渡しをしてもらい、両校の先生は、入学式、オリエンテーションなどの際には学校と病院とをネットでつなぎ、輝希が学校に居場所を作れるよう気にかけてくれました。[心理的支援]

入院中は闘病への不安はもちろんですが、学校のことが気になってしまい、考え始めてしまうとそちらの不安もどんどん大きくなりがちでしたが、このように式典などにネットで参加させてもらったことは、とても嬉しく、今でも大切な思い出になっています。

在籍高校が配信する授業や課題について理解を深めるために特別

Points 2

[現在の課題] 芸術、家庭、情報、保健の授業は週に1~2回で、治療などで欠席すると、すぐに出席日数が足りなくなってしまう。



支援学校が主要5教科を1日1時間、週5日訪問授業を行いました。芸術、家庭、情報、保健などの科目も遠隔授業で履修することができて²、実技を伴う授業は、小児病棟内にスペース（ティーンズルーム）が設けられ、ここで受けられるようになっています。

このような訪問+遠隔のハイブリッドも、この県の特長です。

情報を共有して退院後も支援 (退院時)

退院が近づき、退院時支援会議が開催されました。会議には在籍校にも参加してもらい、退院後に考えられる病状や、その対処に必要なことを共有した上で通学できるよう話し合いました。

リハビリ担当者が会議に加わると、何ができて何ができていないか、どんな場面で手助け（人手）が必要かを学校関係者にイメージしてもらいやすく、利用するトイレ、動線の工夫、手すりやスロープの設置などの具体的な準備が可能になります。[退院後配慮]

退院後の通院時に、チャイルド・ライフ・スペシャリストが、学校生活の様子をさりげなく聞きフォローもしています。

彼が住んでいるのは都市部ではないこともあり、コミュニティが狭く、プライバシーに関する心配事の相談もありました。



この教育支援制度があって息子も私たちも、どれだけ助けられたでしょう。これからは病気治療中の生徒だけでなく、不登校の生徒など「登校できない」生徒への助けにもなってほしいという期待の声もあるようです。(母)

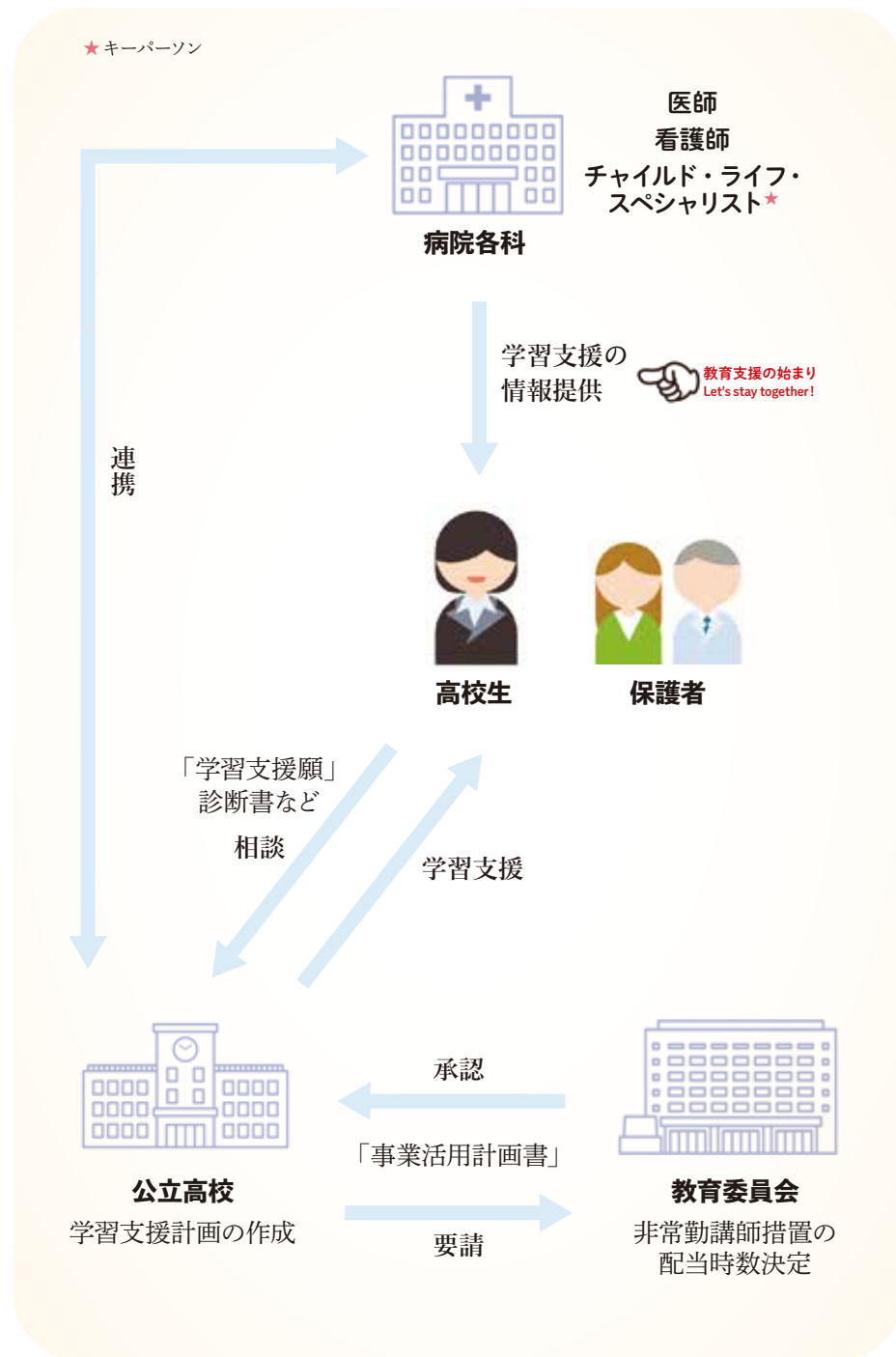
「長期入院生徒 学習支援事業」により 単位を取得した高校生

14

入院中の高校生の
メール（教育支援要望）
が発端で
支援がスタート

学習支援を
実施した高校が
導入を考える他校
にアドバイス

	内容	制度など
教育連携 窓口	病院:チャイルド・ライフ・スペシャリスト 学校:在籍校校長 行政:教育委員会	
連携方法	1.診断時 チャイルド・ライフ・スペシャリストから学習支援について紹介している。 2.退院時支援カンファレンスを実施 入院中のクラスメートとのつながりは担任教諭の裁量で行われている。	公立高校における長期入院生徒学習支援事業 教育委員会 教育振興室 高等学校課 生徒指導グループ
学習支援 体制	学習場所/病室(個室、大部屋一定期検査や実技科目の場合は別室で)	
学習方法	生徒が学校と相談して選択するが、訪問は必須 訪問授業/必須 課題提出 遠隔授業/時間の制約が理由でそれほど多くはないが、iPadで撮影した授業を、後で視聴する方法もとられている。	
単位認定	有	在籍校の判断により、進級決定(教務内規による)。 1年間(1学年)入院していても進級した事例あり。
転校の有無	無	





瞳美ひとみは絵を描くのが好きです。大都会に生まれ育ったからかもしれませんが行ったことのない田舎の風景を空想しながら、水彩で描くのが大好きです。そんな絵をInstagramにあげると、すぐ反応があります。夜遅くまで描いている時に、なんだか目がかすむなど感じていましたが、去年の春からだんだんとひどくなって検査をすることになりました。

高校生から知事への教育支援の願い（学習支援開始まで）

チャイルド・ライフ・スペシャリスト^{*}は、がん告知、病状説明などに立ち会い、患者に寄り添ってくれる存在です。

患者が学生の場合に、学業への不安を訴える家族が特に多かったことから、瞳美の入院した病院では、今までチャイルド・ライフ・スペシャリストが自然と教育支援の窓口になってきました。

瞳美の場合も病気に対しての不安感はもちろんですが、治療が終わって退院できた後の人生設計が見えず、暗くなりがちでしたが、

Points 1

数年前に始まった、この支援事業で公立高校生が対象となった。（以前は中学生までが対象）
高校生のメールが発端となった事は、新聞にも取り上げられ、全国的にも大きな影響があった。

入院してからはチャイルド・ライフ・スペシャリストにその気持ちを率直に話し、そして真摯に受けとめてもらいました。

チャイルド・ライフ・スペシャリストは、今まで何人もの学生の患者と過ごしてきましたので、その不安がどれほどのものか痛いほど分かりました。

入院すると、まず自治体のホームページにある「公立高校における長期入院生徒学習支援事業¹」をダウンロードして、それを基にして説明が行われます。

入院中の高校生へのこの自治体の教育支援は、入院中の高校生が、支援を要望するメールを市のホームページに送ったことが発端となり、始まりました。

そこから少しずつではありますが事例が積み重なり、実績として学生にも説明するようになったり、教育支援を始めようとする高校への説明に、学習支援経験のある高校が加わってくれるようなケースもありました²。

支援を希望する学生の家族が在籍校に依頼し、学校側が事業活用計画書を教育委員会に提出後、支援が開始されます。

^{*}チャイルド・ライフ・スペシャリスト
(123ページ)

Points 2

学校側が支援に消極的と感じたので、「支援実績のある〇〇高校に問い合わせしてほしい」と伝えた事例。（事前に〇〇高校側に了解をとって、当該高校へ支援方法の経験を説明してもらった）

訪問授業を支援の中心として（学習支援の実際）

この自治体では訪問授業は必須ですが、課題配布、遠隔授業が受けられる場合もあります。

双方向通信での遠隔授業について、病院など患者側に教諭などの立ち会いがなくても単位認定される^{*}との通知（2019年11月、文部科学省）が出されるなど、遠隔教育の環境は変化してきています。また、新型コロナウイルス感染症対策がICT（情報通信技術）の社会への浸透を早めてきているのも現状です。

訪問授業は必須となっているため、教育支援を受ける学生の割合はとて多いのですが遠隔授業の利用については、現在それほどではないようです。それは、治療と授業の時間帯が重なってしまうなどの時間の制約などが理由と考えられます。

そこでiPadなどで撮影した授業を生徒が自由な時間に視聴できるオンデマンド方式の遠隔授業も始められました^{**}。クラスメートや教室の様子が映っているので瞳美はこの方法も楽しみにしています。やはり、みんなと一緒に授業を受けているんだと感じられるからで



*年間必要単位を遠隔授業で取れるようになって、子供も一層がんばっていました。広く周知されていて欲しいと願っています。（母）

す。**[心理的支援]** いまは通信技術の発達が早いので、これからもできることがどんどん増えると思います。

この教育支援は退院した後も、在宅中、短期外泊中の、いずれも継続して受けることができ、一時退院のときに自宅での訪問授業でピアノの実技テストを受けた事例もあります。**[退院後配慮]**

訪問授業は普通科では週3回2時間ずつ、定時制は週2回3時間ずつ実施されています。

先生が病室まで来てくれて、学校のことも聞けて嬉しいのですが、病室が個室ではありませんので、瞳美と先生は遠慮しつつ話していました。この訪問時間も治療との兼ね合いや瞳美のその日の体調次第で、なかなか思い通りにはいかないのが悩ましいところでした。

退院後の支援方法を関係者で共有（退院時）

退院が近づくと、入院時と同じメンバーで退院時支援会議が開催され、通学再開後に必要とされる支援が出席者で共有されました。

退院で終わりではなく、患者に寄り添った支援が続けられていきました。



**新型コロナウイルス感染症対策で一人に一台のパソコンが配布されつつある。高校側がパソコンと通信機器を用意するケースも増えてきている。

遠隔授業・対面指導・
余暇活動の機会を
希望により体験できた
高校生

15

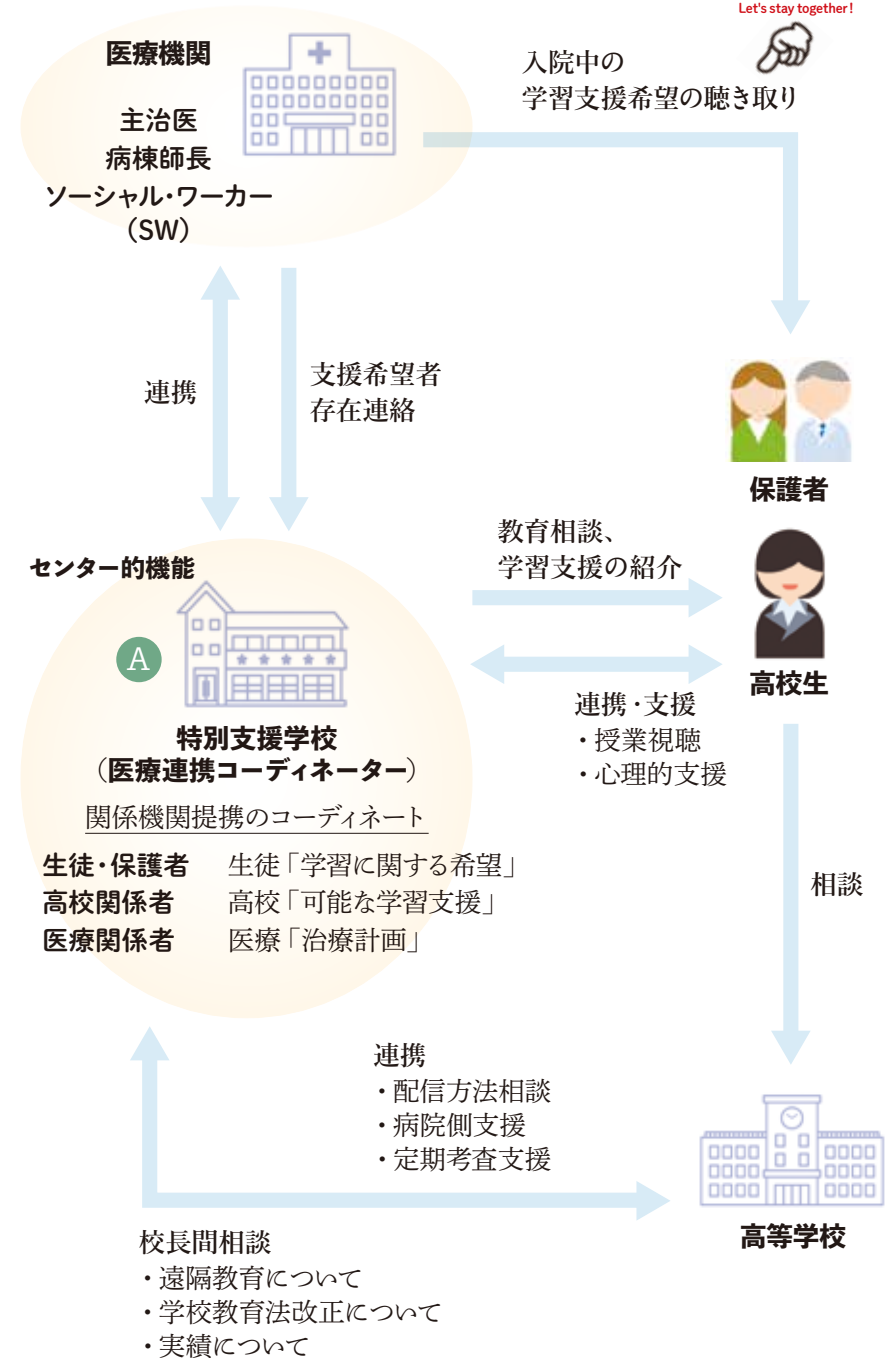
病院内での
高校受験で合格

同世代感覚
大学生ボランティア
の協力



私立高校1年 伊藤陽香さん(仮名)

	内容	制度など
教育連携 窓口	病院: 担当医、病棟師長または がん相談員 学校: 在籍校教諭 特別支援学校: 医教連携コーディネーター A	特別支援学校のセンター的機能の 活用 公立: 教育委員会学校指導課、総 合育成支援課 教育庁指導部高校教育課 私学: 教育庁文化スポーツ部文教 課
連携方法	遠隔授業開始前と退院時に情報共有のためのカンファレンスを実施 病状、治療の状況により高校から要望があった場合は医教連携コー ディネーターが主治医に相談し、カンファレンスを開催	
学習支援 体制	遠隔授業: タブレット端末、リモ ットカメラ、kubi、スマートマイクな どを利用。機器は特別支援学校 備品 ◆回線 病院: モバイルルーターまたは 市教育系ネットワーク 学校: モバイルルーターまたは自 校回線 自宅: 個人のWi-Fi 学習場所: 病室、自宅	機器は文部科学省委託事業「高 等学校段階における入院生徒に 対する教育保障体制整備事業」の 研究費で市が購入し、特別支援学 校から貸し出し 通信費は「高等学校段階における 入院生徒に対する教育保障体制 整備事業」と市が負担
学習方法	遠隔授業	在籍高校のカリキュラム に従い授業配信
単位認定	遠隔授業の視聴と共に定期考査 を高校と同日に受験(医教連携 コーディネーターのサポート有)	
転校の有無	無	





父の影響で小さいころから音楽に親しんできた陽香^{はるか}は、歌うことが大好きでギターも得意です。家族で演奏したり、中学の文化祭で友達と二人で演奏したり。将来はミュージシャンになれたらいいなあと、本気で思っています。入院を経験して病院で過ごすうちに音楽で人を元気にすることが出来たらいいなと思ってパソコンで作曲を始めました。歌っていると私も元気が出てきます。

私立高校の受験を病院内で実施（学習支援開始まで）

陽香が初めて入院したのは、中学3年生の時でした。

病気の事はもちろんですが、それ以上に心配だったのは高校受験です。分教室や在籍校の先生、医師、看護師、ソーシャル・ワーカーのみなさんに相談にのってもらったり、ある時は一緒に在籍中学校へ説明をしてもらったりして、なんとか私立高校の受験が病院内で出来ることになりました¹。

それは医教連携コーディネーターが私立高校側に遠隔教育制度や、

Points 1

在籍中学校、受験希望の高校の前向きな取り組みで、病院内受験が出来た事例である。



その期待される成果について説明し、主治医との検討会をコーディネートすることで、理解を得た事も大きな要因でした。

入試当日は高校からスタッフの方に来ていただき、普段は高校生学習会が開かれる院内の部屋で、ひとりで答案用紙に向かいましたのでドキドキでしたが、見事（！）に合格しました。

さっそく医教連携コーディネーターが陽香の希望である遠隔授業を高校に依頼し高校側もすでに準備をしてくれていて正式な決定後、医療関係者や陽香、高校教諭で検討会を重ねました。

医教連携コーディネーターが軸となり支援（学習支援の実際）

学習支援は、主に3つの方法で行われました。

①遠隔授業による学習支援

遠隔授業ではビデオトークアプリ（Whereby^{*}など）を利用しました。高校側では必要に応じて教育SNSも活用しました。学習支援に必要な機器は、文部科学省委託事業「高等学校段階における入院生徒に対する教育保障体制整備事業」の研究費で市が購入し、特別支援学校から貸し出され²ます。通信費も、その委託事業の研究費や市で負担してくれました。

*「Whereby(ウェアバイ)」
フルウェー発のオンライン会議システム。

Points 2

高校への説明や授業配信方法の相談や関係機関への連携は医教連携コーディネーターが担当した。

高校の同級生と一緒に授業を受けられるのは、入院生活が長い陽香にとって、とても嬉しいことです。同じ黒板を見ていると思うと自分もクラスの一人なんだと感じられます。【心理的支援】

体育は遠隔授業による見学でレポートを提出し、美術や家庭科などは、病室でできる課題であれば、届けてもらった教材で行って提出します。

実習の相互評価を行うような授業では、グループ内の生徒と同級生同士の言葉づかいで話せるので、とても楽しみです。

授業配信時間外でも、このシステムで先生に相談や質問をしたり、課外授業で友達とグループ学習をすることもありました。

スマートフォンなどでは、毎日のようにグループ会話で「情報交換」して盛り上がっています。

②特別支援学校主催学習会

学習会は担当医の許可があれば、学校種別を問わず参加可能です。病院と特別支援学校が連携し、特別支援学校が主催して医教連携コーディネーターが院内で自主学習や余暇活動、教育相談などを行います。【キャリア教育】

学生ボランティアによる支援³も活発です。彼らとは歳が近いの



高校とのかかわり方、治療の見通しや退院後についてなど、家族も本人も心配なことばかりでしたが、医教連携コーディネーターの方と定期的に面談することで安心できましたし、高校の先生にも来院していただき、現在の学校の様子や状況を直接説明してもらえて不安解消に役立ちました。(母)

で、音楽やお笑い芸人の話などでとても盛り上がりますし、一緒に歌ったりもします。彼らの経験した大学受験や大学生活の様子を聞いたりして情報収集しています。【心理的支援・キャリア教育】

③高校生と家族、医療関係者に対する教育相談

陽香は医教連携コーディネーターに入院中の学習継続方法や、生活に関することなどを定期的に相談しています。そして医教連携コーディネーターは担当看護師と一緒に陽香の様子をいつも気にかけて、体調回復が思わしくない時、不安げだなと感じたときなどにはWeb会議システムで懇談会を開いてくれました。

多職種チームでカンファレンス（退院時）

退院後のいろいろなケアに必要な情報共有のため、医教連携コーディネーターを中心に医師や看護師、ソーシャル・ワーカー、高校教諭が参加して支援会議が実施されました。

心理士やカウンセラー、高校教諭の連携で、学校内の設備や陽香の心理的ケアの方法も再確認され、体調が思わしくなく学校を休まなくてはならないときのことも想定して、自宅への授業配信の準備も計画されました。【退院後配慮】

Points 3

社会貢献プロジェクトの一環として、大学の剣道部の学生や高校生学習会に参加の大学生も学生ボランティアに登録して活動している。

本書は、長期療養中の高校生の学習継続のためにご尽力されている病院や教育関係者の方々に、本研究班からの依頼に応じて語っていただいた内容の一部です。下記の行政・教育・医療関係者、ならびに、Web調査、インタビュー調査にご協力いただきましたすべての皆様に感謝申し上げます。近年、文部科学省の通知などによる遠隔教育に係る要件の緩和、GIGAスクール構想によるICT機器の整備、そして、コロナ禍による遠隔授業の受容が進み、病气療養中の高校生の学習継続の環境が整いつつあります。そのような状況を踏まえ、横田雅史先生、谷口明子先生、志村芳紀先生に原稿を繰り返し丁寧に高閲いただきました。ここに深謝申し上げます。最後に、AYA世代のニーズに心を寄せながらデザインを担当して下さった幅雅臣さんに、お礼申し上げます。

研究代表者 堀部敬三
研究分担者 小澤美和
栗本景介
土屋雅子
前田尚子
森 麻希子

宮城県教育庁、宮城県立こども病院、東北大学病院、福島県立医科大学附属病院、福島県立須賀川支援学校医大校、埼玉県立小児医療センター、埼玉県立けやき特別支援学校、東京都立墨東特別支援学校、国立がん研究センター中央病院、日本大学医学部附属板橋病院、岐阜県教育委員会、岐阜市民病院、三重大学医学部附属病院、三重県立かがやき特別支援学校、京都府教育庁、京都市教育委員会、京都大学病院、京都市立桃陽総合支援学校、大阪府立総合医療センター、近畿大学病院、広島県教育委員会、広島大学病院、NPO法人ラ・ファミリエ、四国こどもとおとなの医療センター、国立病院機構九州がんセンター、大分大学医学部附属病院、琉球大学医学部附属病院



高校教育とがん治療の両立のために
長期療養中の高校生の希望に応える好事例集

2022年2月発行

発行・制作・編集

令和1-3年度 厚生労働科学研究費補助金がん対策推進総合研究事業
「AYA世代がん患者に対する精神心理的支援プログラムおよび高校教育の
提供方法の開発と実用化に関する研究」(研究代表者 堀部敬三)

独立行政法人 国立病院機構 名古屋医療センター 臨床研究センター
〒460-0001 愛知県名古屋市中区三の丸4-1-1

デザイン 幅雅臣

がんの診断後に「学校どうしよう」「卒業できるかな」と多くの高校生が悩みます。
高校生の「学びたい」「みんなと一緒に卒業したい」を支えるために、
知っておくと役立つ情報をまとめました。

高校生活とがん治療の 両立のための 教育サポートブック

高校生活とがん治療の 両立のための 教育サポートブック



この教育サポートブックは、高校生活とがん治療の両立を支援するために、厚生労働科学研究「AYA世代がん患者に対する精神心理的支援プログラムおよび高校教育の提供方法の開発と実用化に関する研究」班（研究代表者 堀部敬三）で作成しました。構成や内容は、がん治療を経験した高校生と保護者の方々、特別支援学校の教師の方々、高等学校の教師の方々の声をもとに作成しました。経験者の方々が執筆した進路に関する体験談も掲載しています。高校生・保護者の方々、高等学校の教師の方々、医療者の方々などの関係者のみなさまに広く活用していただける内容となっています。どうぞご利用ください。

- 1章 AYA世代とがん・治療の基礎情報
- 2章 がんのある高校生への教育支援の概要
- 3章 入院治療中の学習継続に向けた相談・手続きの流れ
- 4章 病気の診断時に知っておきたいこと
- 5章 入院治療中の学習継続の方法いろいろ
- 6章 復学／再通学に向けた準備のポイント
- 7章 復学／再通学後の学校生活と進路

■入手方法

以下の URL より PDF ファイルをダウンロードできます。
<https://aya-ken.jp/>
高校生活とがん治療の両立のための 教育サポートブック

■お問い合わせ先

令和1～3年度厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
「AYA世代がん患者に対する精神心理支援プログラムおよび高校教育の
提供方法の開発と実用化に関する研究」班
aya.shien2021@gmail.com

好事例集（本書）とともに教育サポートブックを作成しました（上記）。併せてご利用ください。

令和1-3年度 厚生労働科学研究費補助金
がん対策推進総合研究事業

AYA世代がん患者に対する精神心理的支援プログラム
および高校教育の提供方法の開発と実用化に関する研究

